

大阪音楽大学 研究紀要

第五十九号

要 旨 (1)

研究ノート

全面的遠隔授業における学習者の深い思考を誘発する授業デザインの一考察
～コミュニケーションアプリ LINE を利用した協調学習～ 酒 井 恵 理 子 (5)

幼児の遊びを伴う自発的な歌に関する一考察
—K 市内の幼稚園で 5 年間歌い続けられてきたわらべうたに焦点を当てて—
..... 長 谷 川 真 由 (20)

報 告

2019 年度「松田昌恵 ソプラノリサイタル」研究報告
～日本歌曲の演奏と解釈～ 松 田 昌 恵 (31)

2019 年度 油井美加子ピアノリサイタル
—作品におけるピアノリズムと心象の融合— 油 井 美 加 子 (38)

大阪音楽大学大学院音楽研究科
修士作品の曲目及び修士作品に関する論文の題目、修士論文の題目
修士演奏の曲目及び修士演奏に関する論文の題目 (2019 年度) (45)

大 阪 音 楽 大 学
大阪音楽大学短期大学部
(2020)

要 旨

Summaries

【研究ノート】

Note

全面的遠隔授業における 学習者の深い思考を誘発する授業デザインの一考察 ～コミュニケーションアプリ LINE を利用した協調学習～

酒井恵理子

本年度新入学生は、COVID-19 予防のため入学早々、1 度もクラス仲間や授業担当教員と対面することなく、遠隔授業の受講を余儀なくされた。筆者は、このような状況下にある学生の学習環境を通常の対面授業に近づけるため、Web 会議アプリケーション「Zoom」とコミュニケーションアプリ「LINE」の「オープンチャット」を併用し、授業シラバスで当初予定していたグループディスカッションによる深い思考を誘発する学びあいの実現を試みた。

ディスカッションのような学習者相互による対話を取り入れた学習方法に、東京大学大学発教育支援コンソーシアム推進機構が提唱する「知識構成型ジグソー法」がある。本稿では、この「知識構成型ジグソー法」を基に遠隔授業を設計し、実践した内容を報告するとともに、実践前後における対象学生の学習意欲の変化について考察する。

キーワード：遠隔授業・協調学習・学習観・学習意欲・授業設計

Collaborative English Learning in ONLINE Environment

SAKAI Eriko

The target first-year students have so far had no opportunity to directly get to know either their teacher Sakai or their fellow classmates owing to the COVID-19 disaster. Therefore, the teacher-student relationship has only been based on the indirect contact on the Internet. Under the circumstances, it is interesting to review in a long span the effectiveness of this online remote learning, do researches into the learners' attitude to English learning before and after this ONLINE class.

This paper focuses on surveying (1) the effectiveness of the writer's ONLINE English class, using the LINE messaging app, OpenChat, together with the Zoom videotelephony software program, in students' small group discussions, and (2) how much and how effectively the target collaborative activities will work out in learner interactive communication and ultimately motivate students to learn English not by memorizing but through deep thought provoking activities.

Key words : remote learning, collaborative learning, learning belief,
motivation to learn, class design

【研究ノート】

Note

幼児の遊びを伴う自発的な歌に関する一考察
—K 市内の幼稚園で 5 年間歌い続けられてきたわらべうたに焦点を当てて—

長谷川真由

本研究の目的は、幼児が幼稚園で遊びを伴い自発的に歌う歌の中にわらべうたがどの程度入っているかを、K 市の幼稚園教諭を対象とした 5 年分のアンケート調査から明らかにすることにある。

幼児が 5 年連続で遊びの中で好んで歌っていた歌は 25 曲あり、わらべうたはその内 13 曲入っていた。回答数の割合でみると、全体の 67% がわらべうたであった。「じゃんけん」については、18 種類が挙げられた。

これらの結果や考察から、幼小接続の総合的な学習プランを立案する時に、幼児が遊びを伴い自発的に歌っているわらべうたを中心に据えることが有効であることが示唆された。

キーワード：わらべうた、遊び、幼児、日本の伝統音楽、幼小接続

A Study on Action Play Songs of Young Children
Focusing on Warabeuta for Five Years at Kindergarten in K-City

HASEGAWA Mayu

The purpose of this study is to clarify how much Warabeuta is included in the songs which has been sung by young children with playing activity in kindergarten from a five years questionnaire survey of kindergarten teachers in K city.

There were 25 songs that infants liked to sing during active playing for 5 years, and 13 of them were Warabeuta, i.e. 67% of the total was Warabeuta. As for “rock-paper-scissors”, 18 types were listed.

From these results and considerations, it was suggested that it is effective to focus on Warabeuta, which the infant sings spontaneously with play, when formulating a comprehensive learning plan for Kindergartens to Elementary Schools.

Key words : Warabeuta , Play ; Young children , Japanese traditional music ,
Kindergartens to Elementary Schools

【報 告】
Report

2019 年度 「松田昌恵 ソプラノリサイタル」 研究報告
～日本歌曲の演奏と解釈～

松田昌恵

今回のリサイタルにおいて、日本歌曲にみられるいわゆる日本情緒とよばれる表現の様式（傾向）を再認識したいと思った。そこで、日本的旋法やリズム、発声法を取り入れた別宮貞雄『二つのロンデル』、平井康三郎『日本の笛』、團伊玖磨『美濃びとに』を選んだ。

キーワード：ソロリサイタル、日本歌曲、別宮貞雄、平井康三郎、團伊玖磨

～Performance and Interpretation of Japanese Songs～

MATSUDA Masae

I wished to revalidate a tendency of expression so called Japanese emotions. So I selected songs which incorporate features of Japanese traditional mode, rhythms and vocalization such as “TWO RONDELS” by Sadao Bekku,” To the People of Mino” by Ikuma Dan and “NIHON NO FUE” by Kozaburo Hirai.

Keywords: Solo recital, Japanese song , Sadao Bekku , Kozaburo Hirai ,Ikuma Dan ,

【報 告】
Report

2019 年度 油井美加子ピアノリサイタル
—作品におけるピアノイズムと心象の融合—

油井美加子

2019 年 10 月、ショパンとラヴェルの作品で構成した 13 回目となるソロリサイタルを開催した。選曲にあたってはピアニストとして私の人生の転換期で学んだ作品を取り上げた。本稿ではこれまで長年培ってきた学びや指針について、レッスンでの経験などいくつかの事例を含めて述べている。またピアノ作品における「Image(心象)と演奏」の関連性について、大いなるインスピレーションを得た自身の鮮烈な記憶にふれるとともに、プログラム作品についての作曲背景や演奏する上での留意点、そして後進の指導に際して心がけている思いについても言及している。

キーワード：リサイタル、ショパン、ラヴェル、ピアノイズム、心象

Mikako Yui Piano Recital 2019
“Fusion of Pianism and Image in Piano Works”

YUI Mikako

In October 2019, I performed the 13th solo recital consisting of Chopin and Ravel's works, which I had acquired at the turning point in my life as a pianist. In this report, I describe what I have cultivated in many years, such as the guidelines of the works by referring to my experiences in lessons. In addition, regarding the connection between “Image and Performance” in piano works, I describe my own vivid memory of when I got a great inspiration, as well as the background of composition and notes on performance of program works. I also mention the points of attention and the thoughts I have kept in mind when teaching the younger generation.

Keywords: Recital, Chopin, Ravel, Pianism, Image

【研究ノート】

全面的遠隔授業における 学習者の深い思考を誘発する授業デザインの一考察 ～コミュニケーションアプリ LINE を利用した協調学習～

酒井恵理子

1. はじめに

1.1. 本稿の目的

本年度新入学生は、COVID-19 予防のため入学早々、1 度もクラス仲間や授業担当教員と対面することなく、遠隔授業の受講を余儀なくされた。本実践の目的は、このような状況下にある学生の学習環境を通常の対面授業に近づけるため、「コミュニケーションアプリ LINE」と「Zoom」を併用し、当初シラバスで予定していたグループディスカッションによる、深い思考を誘発する学びあいを実現させることである。グループディスカッションのような学習者相互による対話を取り入れた学習方法に、東京大学大学発教育支援コンソーシアム推進機構が提唱する「知識構成型ジグソー法」がある。本稿では、この「知識構成型ジグソー法」を基に設計した授業とその実践内容を報告し、実践前後の対象学生の学習意欲の変化について考察する。

1.2. 研究の背景

1.2.1 学習観と学習成果、学習意欲の関係

近年の研究により、学習方法に問題がある学習者には、丸暗記しさえすればよい（暗記主義）、あるいは、答えさえ合っていればよい（結果主義）といった考え方を持つ者が多いことがわかってきた（市川他, 1998）。それに対し、「丸暗記だけでなく意味を考えながら覚えることも大切だ」あるいは、「なぜ、または、どの様にして最終的にその答えに行きつくか、その途中経過も大切だ」と考える学習者は、効果的な学習方法を選択し利用する者が多く、その結果、学習成果も高くなることが明らかになってきた（植木, 2002）。

このような学習者の学習に対する一般化された抽象的考え方は「学習観」とよばれる。数学に関して、藤村(2008)は「『暗記・再生』型の学習観を持っている場合、以前に学習した手続きの適用では解決できない問題に対しては、解法を新たに考案しようとしないうちに無答となり、結果的に数学への関心を低下させるのではないかと述べている。数学と同様に英語でも、学習成果に報われない勤勉な学習者は存在する。英語の暗記やドリルに真面目に取り組み、多くの勉強時間を費やしているにもかかわらず、成績が上がらないタ

タイプの学習者を筆者が担当した経験は少なくない。どの科目でも、学習者の学習観は、学習者の学習成果と学習意欲に影響を及ぼすことがあると考えられる。

この学習観を測定する尺度「学習観尺度」を用いて学習者の学びの実態を把握し、より良い学びを検討する取り組みがある。例えば、COMPASS(componential assessment)とは、数学的問題解決の認知モデルに沿って、問題理解、問題解決のプロセスに必要な学力の構成要素（コンポーネント）を領域横断的に抽出し診断しようとするテストであるが、この一部に学習観尺度が利用されている（市川他, 2009）。これは COMPASS の診断結果が、文部科学省が実施する全国学力調査など一般の学力テストでは明らかにされない児童生徒の学力側面を浮き彫りにし、授業改善に生かすことを目的にしているためである（市川他, 2010）。

このように、学習者の学習観は、学習者の学習成果と学習意欲を考える上で重要な要素の 1 つである。本稿では、「学習観」とは、学習者がどのように知識を身に付け、それらを使用してどのように問題解決しようと考えているか、という内容を指すこととする。

1.2.2 学習への「思考の参加」と学習意欲の関係

日本では、一般的に英語は算数など他の科目より遅れて学習が開始されてきた。中谷 (2007) は、「学習への主体的参加」を、「体の参加」と「思考の参加」に大別し、前者が低年齢児の学習において影響力があるのに対し、後者は学習者の年齢が進むにつれ学習者の学習意欲および学習後の満足度に強く影響するようになると述べているが、学習開始時点で一般的に年齢が低くない英語学習では、学習者の学習意欲向上の工夫をする上で特に学習者の英語学習への「思考の参加」を重視しなければならないと考える。

2. 授業実践

2.1. 実践の背景

乳児が母語を習得する過程において、新しい知識を理解するとき無意識に使う既有知識のことをスキーマ（シエマ）とよぶ。スキーマは概念を獲得するための手掛かりである。乳児は観察・経験を通して、スキーマに合致する情報を取捨選択しつつ徐々に積み上げ、母語のスキーマを作り上げていくと考えられている（今井, 2016）。酒井（2020）は、日本語を母語とする英語学習者の既習知識である日本語のスキーマでは説明のつかない日本語スキーマと英語スキーマの「ずれ」を、学習者に認知させる活動が、英語学習者の「思考の参加」を促し英語学習への主体的参加を促進すると考えた。そこで、この 2 つの言語スキーマ間の「ずれ」認知を促す活動を実現させるうる題材として英語の「冠詞」に注目した。一般的に英語の「冠詞」とは、ゼロ冠詞（冠詞がない状態）、不定冠詞（a/an）、定冠詞（the）に区分されるが、これらは日本語にない英語特有の文法概念の一つである。これを踏まえ、酒井（2020）は英語初学者向けの教材開発と授業設計を行い、その授業実践を行ったところ、学習者の英語学習に対する学習意欲の向上が認められたと報告した。大学教育を受け

る前提となる基礎的な知識等についての教育、いわゆるリメディアル教育として、英文法の基礎固めが必要な大学生に、英語の基本をはじめから学習させる大学は少なくない。本学においても、高校までの英語の知識を確認し直すためのクラスが開講されている。そのようなクラスでは、基礎的学習内容を扱いつつ、学生の学習への「思考の参加」を促進するよう、彼らの年齢に相応しい学習方法を採用し、彼らの学習意欲および学習後の満足度を高める工夫が求められる。この点において、酒井（2020）の英語初学者向け授業教材は、本学の英語基礎クラスにおいても効果が期待できると考えた。

2.2. 実践で用いる授業方略

酒井（2020）は授業設計において、学習者の「思考の参加」を促すと同時に学習への主体的参加促進を狙い、「ジグソー法」という授業方略を採用した。ここでいう「ジグソー法」とは、東京大学大学発教育支援コンソーシアム推進機構が協調的な学習方法の 1 つとして提唱する「知識構成型ジグソー法」を指す。

まず教師は、学習者の既有知識や、いくつかの知識を部品として組み合わせることで解けるように対象学習単元での「問い（課題）」を設定し、その問いを解くために必要な資料を 3 種類準備する。授業の最初に「問い（課題）」を提示し、学習者個々の「問い（課題）」に対する考えを意識化させ、その時点での「問い（課題）」に対する各々の答えを明確にさせた後、教師が準備した 3 種類の資料を、同じ資料を読み合うグループに分かれ、資料に書かれた内容や意味を話し合い、グループで理解を深化させる。ここでのグループは「エキスパート班」とよばれ、各メンバーは自分が担当した資料に精通することが求められる。

次に、3 種類別々の資料を担当した学習者が 1 人ずつ所属する新しいグループを作る。このグループは「ジグソー班」とよばれ、メンバーは異なるエキスパート班から抽出された 3 人で構成される。この新しいグループでは、3 人が順にエキスパート活動で各々が得た知識内容を説明し合うが、元の資料を担当したのは自分 1 人であるため、自分の言葉で自分の考えが伝わるように説明することが必要とされる。そのため、この活動では学習者自身の理解状況に対する内省や、新たな疑問提起がなされると同時に、自分と異なる資料を担当した他の 2 人の説明を聞き、自分が担当した資料との関連を考える中で理解を深めることが期待されている。理解が深まったところで、それぞれが担当した 3 種の資料知識を組み合わせ、「問い（課題）」への最終的な答えを創出させる。各ジグソー班からの答えは、その根拠も合わせてクラスで共有する中で、互いの答えと根拠を検討し、その違いを通して、学習者 1 人ひとりが自分なりのまとめ方を吟味し納得する過程を保証する。最後に再び学習者個々で「問い（課題）」に対する答えを記述する。

2.3. 実践対象と単元

本実践は、英語に苦手意識を持つ学生が履修する「英語 a I ⑧2」クラスと「英語 a I ⑧4」クラスの本学短大 1 年生(41 名)および 2 年生(11 名)を対象に行った。このクラスで

は、英語の基礎・基本を重視しつつ英語 4 技能を身につけられるよう工夫されたテキスト「ベーシック・大学英語入門」(樋口千春, 福富かおる) を使用しており、名詞に関する単元 (Unit2) に「冠詞」について考察させる演習問題が収録されていた。対象学生は、英語初学者に比べ冠詞についての知識は有するものの、逆に、それが正しい理解を妨げることも懸念された。

2.4. 実践の環境

2.4.1. 学生への調査

年度当初、COVID-19 予防を目的とした所謂「自粛」生活が続いた。この授業開始までの期間に筆者は英語 a I ⑥履修登録学生に対し e-mail でアンケートを実施した。アンケートの質問内容は、彼らのインターネット環境と使用端末や OS、インターネット上で彼らがコミュニケーション手段として普段利用するアプリケーションを問うものである。大学事務の方々の善意と協力により、4 週間ほどではほぼ全員から回答を得られた。結果を集計したところ、クラス全員がスマートフォンを用いて、コミュニケーションアプリ LINE (以下 LINE という) を日常的に使用しており、Windows を搭載したパソコンを用いた e-mail の送受信をコミュニケーション手段とする学生は少数であることが確認された。

2.4.2. クラス用仮想空間の設置

筆者の理解の範疇では、LINE とは、スマートフォンやパソコンで利用できるアプリケーションの 1 つで、一般には電話番号を有するスマートフォン等の端末にインストールして使用することを前提とされている。実際、LINE をインストールするとき、自分の端末に登録している電話番号の相手が LINE のユーザーだった場合、インストールと同時に自動的に「友達」として登録される機能を持つ。この「友達」同士間では、LINE を介し、互いにテキストメッセージや画像の送受信と音声通話が可能である。

アンケート結果を踏まえ、本年度入学間もない新入生がインターネット上の大学の公式連絡手段である大学ポータルサイトの利用に不慣れなことを鑑み、大学ポータルサイトと並行したクラスの連絡手段として、LINE 上に筆者の授業履修学生専用の仮想空間を立ち上げた。これに際しては、LINE が持つ「オープンチャット」という機能を利用した。これは、前述の「友達」機能と異なり、音声通話による意思疎通が不可能であるが、匿名で不特定多数のユーザーとの情報伝達を可能にする機能である。つまり、「オープンチャット」機能により作成されたグループではグループ参加者本来の LINE アカウントと異なるニックネームやアイコンの設定が可能のため、学生たちの私生活と切り離れた状態で LINE を利用することができる。

以下に筆者が対象学生へ送信した e-mail の内容より LINE オープンチャット (以下 LINE・OC という) のグループへの参加・登録方法に関する箇所を抜粋し示す。

＜対象学生へ送信した e-mail の内容の一部＞

以下の URL または QR コードにアクセスし LINE オープンチャット「2020 英語 a I ⑧」に入っておいてください。

URL=https://line.me*****



【注意点】

- ①「オープンチャット」では、普段みなさんが使用しているアイコン・名前（ニックネーム）を使わず、新しく授業用のニックネームを設定してください。しかしながら、私がどのニックネームが誰なのかを把握する必要がありますので、必ず「学籍番号の下 3 桁」を付けて設定してください。例えば、学生番号 1234567 番で、名前がサカイエリコなら、ニックネームは「567 エリ（数字の後はなんでもいいです）」とか「567 アンジェリーナ」などです。[設定方法]=オープンチャット画面で「参加」をタップすると、「プロフィール設定」画面が開きます。ニックネームとアイコンが設定できたら右上の「参加」ボタンを押してください。
- ②グループに入るには、大学の「学籍番号」が必要です。自分の学籍番号を入力してください。酒井がそれを確認したら「承認」をし、入ることができます。これで、設定したニックネームとアイコンでオープンチャットに参加できます。

LINE の説明は以上ですが、みなさんは大学のポータルにあげられた連絡や掲示を自分のスマートフォンですぐ確認できるよう、ふだん自分が使うメールアドレスに転送する設定をしていますか？ この授業の外に、皆さんの専攻科目に関わる重要なお知らせが 次々にアップされています。まだの人は必ずその設定をしてください。

このクラス用 LINE・OC の開設により、大学ポータルサイトの操作や遠隔授業の受講に関して学生への支援が以前より円滑になり、彼らも徐々にこの機能の操作に適応していった。そこで、このクラス連絡用とは別に、授業用にメッセージ等のやり取りをする場所（以下トークルームという）を LINE・OC で複数用意すれば、遠隔授業内でもグループディスカッション活動を実現できるのではないかと考えた。対象クラスの学生を 3～4 人の班に分けると、エキスパート活動用に 9 つ、ジグソー活動用に 9 つ、合わせて 18 のトークルームが必要であった。そこで、授業用 LINE・OC トークルーム 18 個を 2 クラス分、計 36 個を新設した。

2.4.3. 授業用仮想空間の設置

活動ごとに各班のメンバーの名前とトークルームの URL をセットにしてまとめた。この内容をクラス用 LINE・OC のトーク画面に貼り付けておき、実践授業当日、学生が自分の属する班の URL をタップすれば、自分の活動場所（トークルーム）へ移動できるよう準備した。活動に必要な資料やワークシートは、各トークルームの画面に画像（写真）

やテキストメッセージにして貼り付けた。紙媒体で資料等を手元に置きたい学生には、大学ポータルサイトから個々にダウンロードしてプリントアウトできるよう、大学ポータルの授業用資料フォルダに PDF 化して置いた。

2.5. 実践の内容

2.5.1. 実践の時期

筆者は前期授業全 13 コマのうち、5 コマで Zoom と LINE を用いてグループディスカッションを実施した。本実践はこの 5 コマのうちの 2 コマに相当する。また、この 2 コマは連続した授業内で行った。授業 2 コマ分の時間を費やしたのは、対象学生が電子機器操作等に必要な時間を考慮し、ディスカッション活動そのものに十分な時間を確保するためである。また、授業は毎回「本時の授業スケジュールの提示」→「発音練習」→「前時のふりかえりと宿題に対するコメント」→「本時のメイン」→「次回までの課題と予習の提示」という流れで行っているが、本実践は 2 コマとも主に「本時のメイン」に相当する。

2.5.2. 実践の手順

本実践授業の流れを図 1 に示す。実践直前の授業では、テキストの問題(ベーシック・大学英語入門, p11)を解き、ゼロ冠詞、複数形を意味する s/es と不定冠詞 (a/an)について、考察することを宿題とした。

実践授業は 2 回とも対象学生が Zoom にログインした状態から始めた。実践授業 1 コマ目では、宿題の解説の前に、学生に宿題について感想を聴き、彼らの多くが英語の名詞概念を理解する難しさを実感したことを確認した。続いて、本実践授業の課題問題である「You've got () on your mouth! Did you have fried eggs for breakfast? (1) a few eggs (2) an egg (3) some egg (4) some eggs」(平成 21 年度大学入試センター本試験第 2 問 A 問 5 を小幅改変)を提示し、学生各々に正解を考えさせた。Zoom のマイク機能を用いて数人の学生に質問したところ、根拠を伴った解答を出せる者はいなかった。次に、この課題問題を解くには、英語の名詞に a/an が「必要」(または複数形の s が必要)な場合と「不要」な場合について考察する必要があることを学生に示唆し、その考察に有効な手順として「知識構成型ジグソー法」を挙げ、活動要領を説明した。次いで、エキスパート活動とジグソー活動のために LINE・OC トークルームを 2 種類用意しており、それぞれのトークルームに考察と活動に必要な資料を準備していることを伝えた。今から通常遠隔授業を行っている Zoom をログアウトして LINE へ移動してトークルームで活動し、授業の終わりに Zoom に再集合することを学生に周知し、最後に班分けを発表して、LINE へ移動を開始させた。機器操作 (Zoom 画面上で発表した班分けと同じ内容が、クラス用 LINE・OC のトーク画面に貼り付けてあるので、その中に自分が所属する班を見つけ、URL をタップすること) や、自分の移動先に関して要領を得ない学生へは、e-mail とクラス用 LINE・OC を駆使し、1 人 1 人個別に対応し誘導した。同時に、速やかに

< 図 1, 実践授業の流れ >

授業	「本時のメイン」内容	グループ活動内容	学生のアクセス先	学生への支援(支援の手段)
実践、 直前、	・品詞の概念。 ・ゼロ冠詞・定冠詞・複数形s/esに関する宿題 提示。	なし。	Zoom。	・演習と解説(パワーポイントのスライド)。 ・質疑応答(Zoom 音声マイク)。
、	(事前準備)・LINE グループ作成(18 個)・各グループへの「招待URL」を取得・学生の班分け(班ごとに「招待URL」を付与)・資料と指示を各トーク画面に貼り付け。			
実践、 1 コマ目、	・宿題の確認。 ・課題問題の提示。 ・グループ活動内容と方法、移動先等の説明。	なし。	Zoom。	・説明(パワーポイントのスライド)。 ・質疑応答(Zoom 音声マイク)。
	・エキスパート班活動。	資料 A 担当×3 グループ。 資料 B 担当×3 グループ。 資料 C 担当×3 グループ。	LINE。 (エキスパート用)。	・移動先への誘導(Zoom 音声マイク/メール/クラス用 OOTーク画面)。 ・移動先での活動支援(メール/クラス用 OOTーク画面/移動先 OOT ーク画面)。
	・各班の活動内容の確認。 ・翌週授業の説明。 ・前回の宿題について再考案する宿題の提示。	なし。	Zoom。	・移動先への誘導(Zoom 音声マイク/メール/クラス用 OOTーク画面 /移動先 OOTーク画面)。 ・説明(パワーポイントのスライド)。 ・質疑応答(Zoom 音声マイク)。
実践、 2 コマ目、	・宿題の確認。 ・課題問題(グループ活動の目的)の再確認。 ・グループ活動内容と方法、移動先等の説明。	なし。	Zoom。	・説明(パワーポイントのスライド)。 ・質疑応答(Zoom 音声マイク)。
	・前時のエキスパート班活動内容の確認。	資料 A 担当×3 グループ。 資料 B 担当×3 グループ。 資料 C 担当×3 グループ。	LINE。 (エキスパート用)。	・移動先への誘導(Zoom 音声マイク/メール/クラス用 OOTーク画面)。 ・移動先での活動支援(メール/クラス用 OOTーク画面/移動先 OOT ーク画面)。
	・ジグソー班活動。	ジグソー班活動。 ・課題問題解決活動。 (資料 A 担当者+資料 B 担当 者+資料 C 担当者)。 ×9 グループ。	LINE。 (ジグソー用)。	・移動先への誘導(Zoom 音声マイク/メール/クラス用 OOTーク画面)。 ・移動先での活動支援(メール/クラス用 OOTーク画面/移動先 OOT ーク画面)。
、	・各班の活動内容の確認。 ・課題問題の解説と解答。 ・前前回の宿題の解答。	なし。	Zoom。	・移動先への誘導(Zoom 音声マイク/メール/クラス用 OOTーク画面 /移動先 OOTーク画面)。 ・説明(パワーポイントのスライド)。 ・質疑応答(Zoom 音声マイク)。

移動に成功した学生へは、移動先で必要資料等を確認し活動を開始できそうか、各々のトーク画面にメッセージを入力して確認した。

学生の活動状況を把握するため、筆者のパソコン画面に全ての班のトーク画面を開いておき、可能な限り対面授業に近い対応ができるよう、各トークルームを巡回した (図 2)。

<図 2, 各班のトーク画面>



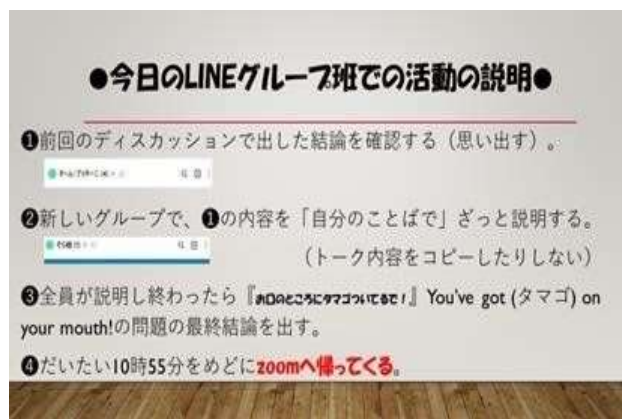
例えば、学生は他のグループから閉じられたインターネット上の空間で活動しているため、一般的な対面授業が行われる教室の空間のように、別のグループの様子を感じることができない。そこで、話し合いが停滞している班のトーク画面に、他の班のトーク画面の一部を撮影し、そのスクリーンショット (画面写真) を貼り付ける等して介入した。エキスパート活動の目途がつく頃合いを見て、一旦活動終了の合図を各トークルームに入力して回り、Zoom へ再ログインするよう学生に促した。クラスの学生全員が再集合したところで、大まかな講評と翌週の連絡をして授業を終了した。このときの連絡内容は、翌週も授業は Zoom からスタートすること、LINE・OC トークルームは授業時間外も自由に使ってよいこと、次回はジグソー活動へ移るので、その準備が十分でないと感じる班は翌週までに本時の活動を完遂しておくこと、である。

実践授業 2 コマ目では、前時のエキスパート班活動で得た知識をジグソー班のメンバーで共有し、得られた 3 種類の知識を統合させて課題問題を解くため、ジグソー活動の班分けと LINE・OC トークルームの場所 (URL) を提示し (図 3)、まず前回の活動のふりかえりを十分行ってからジグソー活動へ移るよう指示した。各ジグソー班メンバーが、課題問題に立ち戻り、持ち寄った知識を基にある程度ディスカッションできた頃に、各トークルームへ Zoom に再集合するよう合図した。クラスの学生が Zoom に揃ったところで、各班が至った最終結論を共有した。本来ならば、ここで各グループごとに意見発表を行わせるべきであるが、マイク機能を有しないデバイスを使用して授業に参加する学生を考慮し、筆者のパソコン画面に各ジグソー班のトーク画面を共有することに留めた。最後に、課題問題の正解を提示し、学生に今回の課題問題の解答方法を個々に整理しメモを取らせ、

この整理した内容を反映させて、テキストの問題(ベーシック・大学英語入門, p.11)を解き直すことを宿題とした。翌週の授業では、本実践授業で得た問題解決方法をテキストの問題の解答に各々がどう反映させたか尋ねる旨を予告した。

宿題の提出先は、大学ポータルサイトの課題提出フォルダとし、宿題に取り組んだ様子を写真撮影して画像を添付するか、フォルダ内に内容を直接入力すると共に、本実践授業について簡単に感想を記述するよう求めた。

＜図 3, Zoom で提供したスライド＞



3. 考察

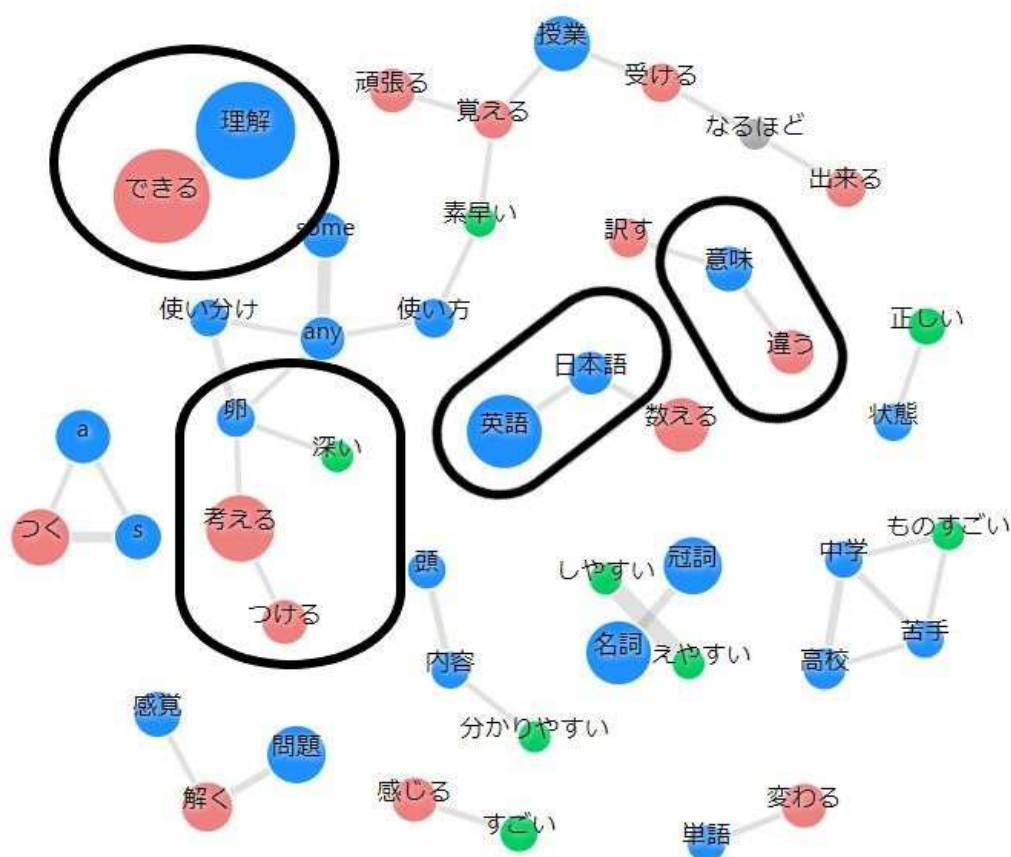
3.1. 学生の活動の様子

本実践は、グループメンバーは互いに面識がない中で、文字入力のみによるコミュニケーション活動を学生に強いるものであったが、多くのグループで活発に意見交換する様子が確認された。他方で、テキスト入力の操作が不得意な学生が、思い通りに意思疎通が出来ず焦燥する様子も散見された。しかしその一方で、授業終了後、未解決箇所について話し合いを続けるグループも確認された。これは、対象学生の大多数が遠隔授業の受講用デバイスにスマートフォンを使用していること、対象学生がスマートフォンの操作に精通し、これを日常的に携帯していること、そして対象学生と LINE は親和性が高いことに起因する部分が大きいと推察する。

3.2. 学生の感想

対象学生 41 人から本実践授業に対する感想が得られた。この記述内容を AI テキストマイニング(User Local, Inc.)という分析ツールを用いて、学生の自由記述中に出現する単語の中で、出現傾向が類似するものを線で結ぶ、「単語の共起ネットワーク図」を作成した(図 4)。「共起」とは、改行や句読点などで区切られた文中に同時に出現する単語のセットを意味する。単語共起関係の全体像を見渡すため、単語の出現回数を円の大きさで表し、動詞を赤、名詞を青、形容詞を緑で色分けした。単語の共起の程度が強いほど太い線で円同士を結び、意味的な関連性が比較的強い単語セットを互いに近く配置したところ、学習内容の理解に関連した「理解」－「できる」、日本語スキーマと英語スキーマの「ずれ」に関連する「英語」－「日本語」、「意味」－「違う」、思考に関連する「考える」－「卵」－「つける」などの組合せが確認された(図 4 中の囲い部分)。

＜図 4, 単語の共起ネットワーク図＞



また、学生相互の対話を通して、言語スキーマの「ずれ」について考察する活動が有意義だったとするコメントも少なくなかった。このことから英語学習への「思考の参加」を学生に促すことに概ね貢献できたと考える。以下に彼らの感想の一部を示す。

- ・ 授業中に同じクラスの人とグループラインを使用して問題の確認をしていると色々な考え方が出てくるので毎回面白いです。
- ・ 自分が独特な覚え方をしてる時があったりと再発見できたので面白かったです。日頃目を向けないところに目を向けて討論等できたかなと思います！
- ・ 日頃ならスルーしてしまうようなことでも、英語だとこんな風を書くんだなど発見もたくさんありました！
- ・ 日本人の感覚と英語圏の感覚が大きく異なることが分かり、このような問題を解く経験がなかったのでとても参考になりました。
- ・ たまご問題が色々な場面で参考になったので、煮詰まった時などに思い出していき、今後さらに理解を深めていきたいです。

- ・ 考えず感覚でやっていたけど、しっかりイメージして考える事が大切だと分かった。
- ・ どこが悪いのか考える、なぜそうなるのか考える大切さがわかった気がしました。
- ・ どうしたらそうなるのかと説明することが一番難しいです。だからその分、自分は理解できてないんだと焦ってしまっています。
- ・ 授業を受けて、理解することができました。違いがよく分かりました！
- ・ 今までは感覚で問題を解いていて、あまり理解してなかったなあと思いました。
- ・ ディスカッションを通してじっくり考える事で少し理解できたように感じた。
- ・ egg の問題を踏まえて p.11 の問題を解いてみました。
- ・ なんとなく聞いたことがないリズムだからこれは違うかな、という感覚で解いたので、どのあたりがどのようにわからなかったか、なぜその答えになるのか、そういう決まりなのだろうとしか思えなくて、答えることができませんでした。
- ・ a がいるかいないか卵や魚を思い出し、使い分けに気を付け、なぜその答えなのか理解して解くようにしたいと思います。
- ・ トークルームで複数人でディスカッションした時の内容がとても分かりやすかったので、皆と話し合って答えを出すことは今後の印象にも残るので大事ななと思いました。
- ・ 冠詞、名詞は日本語なら全く気にしないことですが英語になるとかなり大切になるなど改めてわかりました。

3.3. 対象学生の学習動機の変化

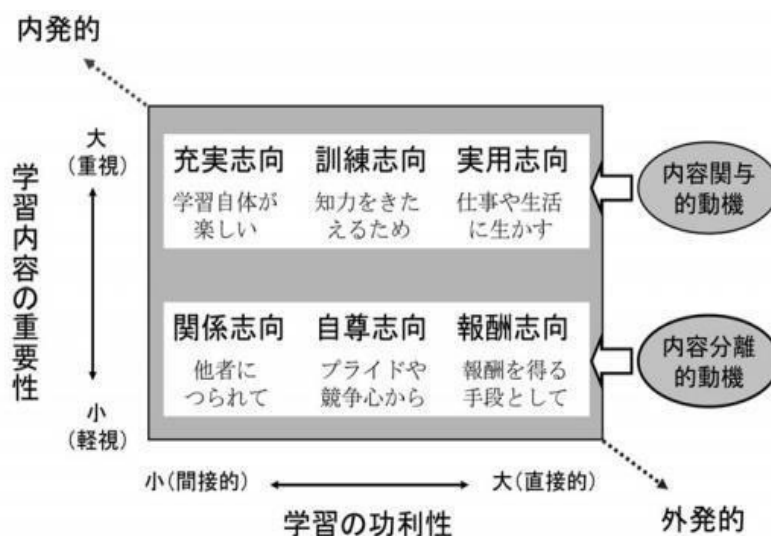
対象学生が英語の勉強は何のためにすると考えているか、また、これまで英語をどのように勉強してきたか等を把握するため、COMPASS の一部として利用された学習観尺度(市川, 1995)を用いて、「充実志向」「訓練志向」「実用志向」「関係志向」「自尊志向」「報酬志向」の 6 種類の学習動機に関する 36 項目から成る質問紙を作成した。

市川(1995)によると、この 6 種類の学習動機のうち、「充実志向」「訓練志向」「実用志向」の 3 つは相互に比較的相関性が高く、「関係志向」「自尊志向」「報酬志向」も同様に比較的相関が高い。これらを構造化し図式化した「学習動機の 2 要因モデル」(図 5)において、上段の「充実志向」「訓練志向」「実用志向」の 3 つは、知的好奇心や向上心に関連した学習内容に関与する「内容関与的動機」であるのに対し、下段の「関係志向」「自尊志向」「報酬志向」の 3 つは、学習内容と関連が薄く、場合によってはプラスにもマイナスにも受け取ることが出来る、「内容分離的動機」である。

アンケート調査は計 2 回実施し、第 1 回目調査を本年度前期第 1 週目授業 (Zoom による遠隔授業内) で、第 2 回目調査を後期第 2 週目および第 3 週目の授業 (対面授業内)

＜図 5, 学習尺度の 2 要因モデル＞

(市川ほか, 2009)より



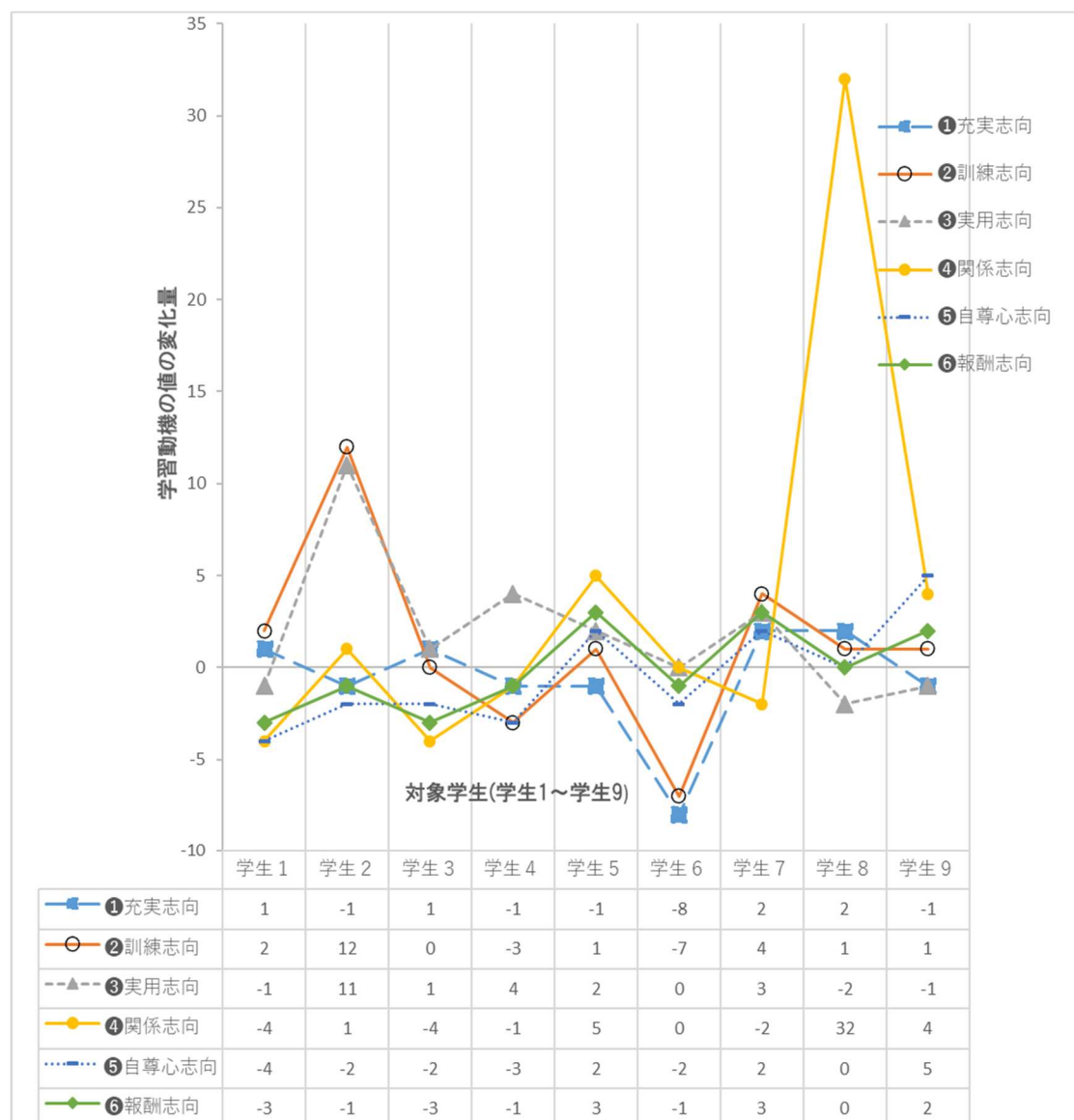
で行った。第 2 回目アンケート調査を週をまたいで実施したのは、後期の第 2 週目に今年度最初の対面授業を試みたためである。COVID-19 対策としてクラスを 2 分割し、教室内の人数を半分にしてお対面授業を実施した。学生には 2 週目と 3 週目に、対面授業とビデオオンデマンド授業を交互に受講してもらった。

アンケート調査の実施は、倫理的配慮として、質問紙に明記した「回答は任意である」、「成績評価とは無関係である」という箇所を読み上げてから行った。各調査で得られた有効回答は、第 1 回目では 32 人、第 2 回目では 9 人だった。第 2 回目調査時に得られた有効回答が少ないのは、対面授業を予定していた 2 週目に本校への爆破予告事件が発生したこと、第 3 週目に関西が大型台風に襲われたことに起因する。

本稿では、現時点で協力を得られた学生のうち、第 1 回目調査の結果と比較可能な学生 9 人について、学習動機の 2 要因・6 種類について分析と考察を行うこととする。質問項目への回答は「(5)とてもよくあてはまる」から「(1)ほとんどあてはまらない」までの 5 件法で行った。得られた値を集計し、2 度目のアンケートの値が最初のアンケートの値から授業を経てどれだけ変化したか、その変化量を求めた。「学習動機の値の変化量」を縦軸におき、横軸に分析対象学生 9 人を 1 人ずつ並べ、6 つの学習動機「①充実志向」、「②訓練志向」、「③実用志向」、「④関係志向」、「⑤自尊志向」、「⑥報酬志向」の値の変化量が同じとき、重複した値を可視化する折れ線グラフを作成した(図 6)。

その結果、全体的に「充実志向」「訓練志向」「実用志向」の数値の上昇が認められた。一方、「関係志向」「自尊志向」「報酬志向」の 3 つに関しても数値が上昇した学生も確認されたが、これは 2 度目のアンケート実施までに授業で行った計 5 回のグループディスカッションやグループワークが影響したとも考えられる。

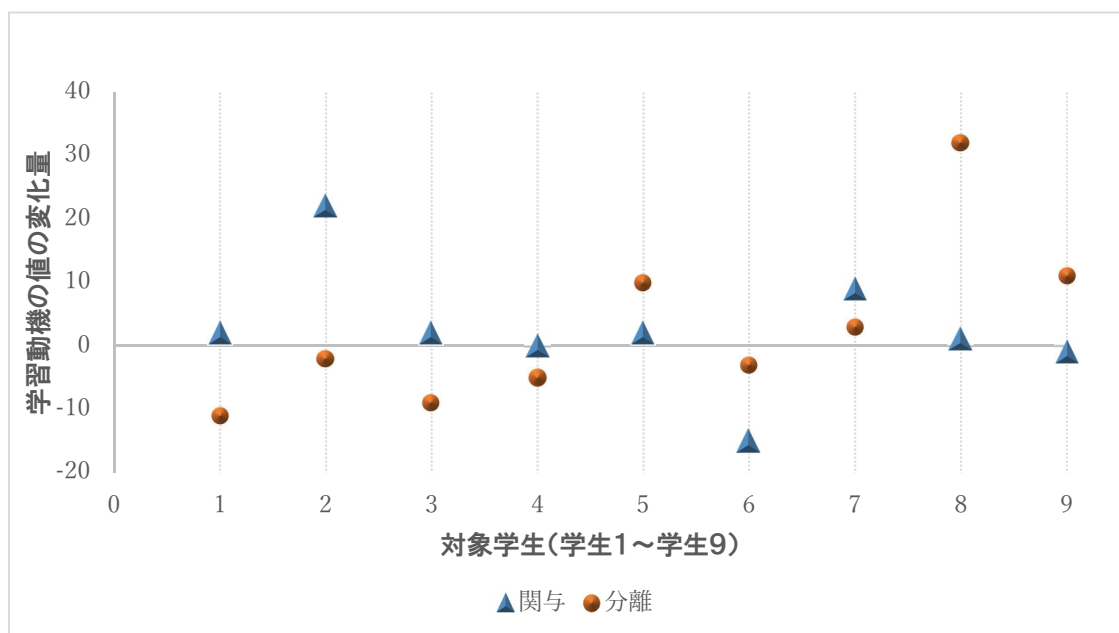
＜図 6, 分析対象学生 6 人の学習動機の値の変化＞



これらの因子は、学習内容に関与する上段の 3 つと関係が薄く、本実践研究では上段の「充実志向」「訓練志向」「実用志向」を重視していることから、「充実志向」「訓練志向」「実用志向」の 3 つの数値を合計した「内容関与的動機」の値と、「関係志向」「自尊心志向」「報酬志向」の 3 つの数値を合計した「内容分離的動機」の値（凡例は「分離」と表示）を、それぞれ 2 度目のアンケートの値から最初のアンケートの値を差し引き、「学習動機の値の変化量」を求め、「学習動機の 2 要因の値の変化量」として縦軸におき、分析対象学生 9 人を横軸に 1～9 まで 1 人ずつ並べた（図 7）。なお、図中では「内容関与的動機の値の変化量」の凡例ラベルを「関与」と表示し、「内容分離的動機の値の変化量」の凡例を「分離」と表記した。その結果、9 人のうち 6 人の内容関与動機の値の変化量（「関与」）が上昇し、2 人が下降していることが確認された。1 人には変化がなかった。

このことから、この 9 人に関して、本実践の目的である対象学習者の学習意欲向上は概ね達成されたと考える。

＜図 7、分析対象学生の内容寛容動機と内容分離動機の値の変化＞



4. 今後の展望

本稿は年度途中における授業の 1 部分を抽出し考察したものにとどまり、対象学生の学習観へどのような影響を与え、学習意欲向上に貢献し得たか明確な結論に至るには現段階では困難である。更に、学習動機に関する学習観尺度(市川, 1995)を用いたアンケート調査結果の分析においては、十分なデータ収集が出来ず、分析に必要な資料を得ることができなかった。また、ディスカッション活動における対象学生の発言記録を丁寧に分析し、試験の成績と比較照合したうえで、対象学生の学習成果との関連を検証する必要がある。

こうした課題を踏まえ、今後さらなる取り組みを継続することが求められる。しかしながら、学生が相互に意見を交換し合えるよう遠隔授業を設計し、彼らが、不自由ながらも、ディスカッション活動に取り組む過程で、学習内容に対して一歩踏み込んで思考を深める場を提供することは不可能ではないことを示したといえよう。

本実践では、遠隔授業において何度も電子機器操作を学生に強いる必要があった。しかしながら、どの学生も筆者の要望に快く協力し、素早く適応し対処してくれた。今年度のような非常事態下では、彼らの真摯な授業参加姿勢がなければ、授業者側の如何なる工夫も酬われなかったことは明らかである。今後より一層努力し、彼らに報いたいと考える。

引用参考文献および参考文献

市川伸一

1995「学習動機の構造と学習観との関連」『日本教育心理学会総会発表論文集 第37回
総会発表論文集』L6015、1995年08月31日発行、pp.177

2010『現代の認知心理学 5 発達と学習』日本認知心理学会監修、市川伸一編、北大路
書房、pp.327-329

市川伸一、堀野緑、久保信子

1998『学習方法を支える学習観と学習動機 市川伸一（編）認知カウンセリングから見
た学習方法の相談と指導』ブレーン出版：東京、pp.186-203

市川伸一、南風原朝和、杉澤武俊、瀬尾美紀子、清河幸子、犬塚美輪、村山航、植阪友理、
小林寛子、篠ヶ谷圭太

2009「数学の学力・学習力診断テスト COMPASS の開発」『認知科学 特集・学校教育と
認知科学』16巻3号、pp. 333-347

今井むつみ

2016『学びとは何か＜探求人＞になるために』岩波新書植木理恵

2002「高校生の学習観の構造」『教育心理学研究』50巻3号、pp.301-310

岡田いずみ

2007「学習方略の教授と学習意欲」『教育心理学研究』55巻、pp.287-299

酒井恵理子

2020「比較により認知的不一致を生む教育方法の研究—小学校英語授業デザインをもと
に—」日本教育工学会 2020 年春季全国大会講演論文集、4-N203-4

樋口千春、福富かおる

2020『Focus on Basic English for Communication ベーシック・大学英語入門』松柏
社 ISBN978-4-88198-715-5

中谷素之編著、安藤史高、岡田涼

2007『学ぶ意欲を育てる人間関係づくり動機づけの教育心理学』金子書房

堀野緑、市川伸一

1997「英語学習における学習動機と学習方略」『教育心理学研究』45巻2号、pp.140-
147

藤村宣之

2008『知識の獲得・利用とメタ認知三宮真知子（編著）メタ認知—学習力を支える高次
認知機能—』北大路書房、pp.39-54

【研究ノート】

幼児の遊びを伴う自発的な歌に関する一考察

—K 市内の幼稚園で 5 年間歌い続けられてきたわらべうたに焦点を当てて—

長谷川真由

1 研究の背景

現代の幼児たちが、自らの意思で身体を使って自由に遊んでいる時に歌っている歌は、どのような歌なのか。その中に、昔から遊び歌い継がれている伝承遊びは、どの程度入っているのか。筆者は、こうした問いを持ち続けている。そのような問題意識をもつようになったきっかけは、大別して次の 2 つの学術的背景がもととなっている。

1 つ目は、澤田篤子（2009、2016）が研究代表の科学研究費助成事業、基盤研究（C）（以下、「科研」とする）による研究、すなわち日本の伝統音楽文化の特質に根差した教材開発や授業プログラム作成に研究分担者として参画したことにある。日本音楽の可変的でもあり不変的でもあるといった両面性および他律性という伝統音楽の特質に依拠し、筆者は主に次の 2 つの視点から研究を進めた。まず、教材開発と授業プログラムでは、小学生を対象とした竹の音材による音楽づくりに関わった（長谷川、2013）。また、保育内容における幼稚園でのわらべうた遊びの観察・参与観察を行った（神蔵・長谷川:2014、長谷川:2015）。澤田の「科研」における今後の課題の 1 つに、表現教科の総合的な取り扱いを参考として、就学前から小学校低中学年に至る総合的な学習プランの立案が挙げられた。

2 つ目は、筆者が音楽教育の理論的背景の基盤としているアメリカの教育哲学者・教育学者である J. デューイ（1859-1952）の「オキュペーション」活動や芸術論による視点である（橋本、2008）。デューイは、芸術を我々の日常生活と結びつけたものと捉え、芸術作品は生活と切り離した純粋芸術の枠の中ではなく、生活経験から生み出されると考えていた。自己（有機体）と環境（日常生活）との相互作用により、芸術作品が生み出されるという考え方である。子どもたちの生きることへの表現欲求としての衝動性が、美的経験の発端となるため、衝動性を大切に、活動そのものに意味をもつ「オキュペーション（構成的創造活動）」は、学校の中心課程に位置づけられた。幼稚園という生活経験の中で、幼児が自発的・創造的に身体諸器官や五感をフルに働かせて遊び歌い続けてきた歌が、まさにデューイのいう美的経験としての表現であるならば、そうした歌を幼小接続プログラムの基軸に据えた音楽科の授業を構想することができるのではないかと考えた。

こうした背景のもと、筆者は、2013 年から毎年 10 月に実施されている神奈川県 K 市内の幼稚園教諭を対象とした「免許状更新講習・10 年教諭研究会」（以下、「研修」とする）において、「日本の伝統音楽・文化を子どもたちに伝えよう」というテーマで、わらべうた

遊びや竹の音素材を使った遊びを紹介している。また、2015年から継続して、「研修」に集まった幼稚園教諭を対象に、「子どもの自発的な遊びを伴う歌」に関するアンケート調査を行ってきた。2019年10月19日の日本音楽教育学会の第50回大会（於：東京藝術大学）では、幼稚園教諭に行ったアンケート調査の過去4年分（2015年～2018年）の分析結果を「幼児の自発的な遊びを伴う自発的な歌に関する一考察」と題して口頭発表した。

2 研究の目的

本研究では、2019年のデータも加えて、2015年から2019年までの5年間のアンケート調査の分析結果から「K市内の幼稚園で園児たちが歌い続けている歌の中に、わらべうたがどの程度入っているか」を明らかにし、幼児の遊びを伴う自発的な歌に関する何らかの傾向を考察することを目的とする。

3 研究の方法

3-1 アンケートの対象者

アンケート調査は、毎年10月に研修に集まった神奈川県K市の幼稚園教諭を対象とする。年度によって集まる人数は異なるが、毎年平均して80人から100人程度の受講者がいる。本研究のデータ整理は、回収できた5年分の有効回答数497枚を対象とする（表1）。

表1 年度別調査日程と有効回答数

年	日 程	有効回答数
2019年	10月16日	91
2018年	10月17日	134
2017年	10月18日	86
2016年	10月19日	87
2015年	10月21日	99

3-2 アンケートの質問項目と補足説明の内容

アンケート調査では下記の2つの設問を設定した。

設問1 今年、園児達が遊びながら歌っていた歌（口ずさんでいた歌）は何ですか。それはどのような場面（シーン）や場所で歌っていましたか。

設問2 今年、園児達が遊びを伴い自発的に歌っていた歌は何ですか。それはどのような場面（シーン）や場所で歌っていましたか。

アンケートを配布した後、補足説明として、設問1と設問2の違いを口頭で次のように伝えた。

- ① 設問 1 については、幼稚園教諭が主導で教えた歌や「一緒に遊ぼう」と幼稚園教諭から誘った遊びを含めてよいこと（例えば、運動会のお遊戯の歌、大縄遊びを幼稚園教諭主導で行った場合、設問 1 にその曲名等を書いてよいこと）。
- ② 設問 1 については、幼児が鼻歌や口ずさんでいた歌を含んでよいこと。
- ③ 設問 2 については、あくまでも幼児主体で遊んでいた時に歌っていた歌を書くこと（例えば、自由遊びの際、幼児が以前習ったことのある大縄で遊びたい時に、大縄の係を幼稚園教諭にお願いしてきて、一緒に遊んだ場合はここに含んでよいこと）。
- ④ 設問 2 については、鼻歌や口ずさむ歌は含まないで、幼児が主体的に遊ぼうとしている時に歌っていた歌について書くこと。
- ⑤ 設問 1 の回答と設問 2 の回答が重なる場合もあること。
- ⑥ 設問 1 も設問 2 も、思い出せる範囲で書いてよいこと（幼児の遊んでいたシーンで思い出せたものを書くこと）。

3-3 倫理的配慮

研究目的でアンケート調査を行うことは、毎年主催者に了承を得ている。また、用紙に下記の文言を明記するとともに口頭でも同様のことを説明した。

S 音楽大学と S こども短期大学の教員を中心に、日本の伝統音楽の特質に根ざした教材開発等について継続的に共同研究しております。そこで、今回、幼稚園教諭の皆様にならうた遊びに関連した保育内容についてのアンケートへのご協力をお願いいたします。なお、このシートは、終了後回収し、個人が特定されることのないことを配慮した上で、内容の一部を学術的観点から整理し、公表される場合があることをご承知ください。

3-4 分析方法

本研究は、幼児が遊びを伴い自発的に歌っていた歌を分析対象とするため、アンケートの設問 2 の結果を分析対象とする。1 年ごとにアンケートに書かれた曲名とその人数を整理し、5 年間を通して挙げられた曲名を降順で並べ、大人が作曲した曲か作曲者不詳の曲かの区別をする。わらべうたの定義や分類については、本稿の 5「本研究におけるわらべうたの定義」に従い、分析の必要性に応じて種類についても明示する。

4 先行研究

本研究では、幼児が遊びを伴い自発的に歌っている歌には、日本の伝統的なわらべうたが含まれているのではないかという仮説のもとにデータを検証・整理する。したがって、先行研究は、我が国の幼児を対象としたわらべうたの調査、幼児を対象とした歌の調査が中心となる。

幼児を対象としたわらべうたの教育的価値や意義、効果については、音楽的側面や発達の側面から数多くの学術研究がある⁽¹⁾。一方、調査研究においては、51 年前に小泉文夫(1969)

が東京の子どもたちを中心にわらべ歌の諸相を研究した大規模調査の後に続くような学術的な研究は見当たらない。近年では秋山治子（2012:17-43）が、東京都一円の幼稚園・保育園（780 件）に「どのような歌が歌われているか」という質問紙による大規模調査を行った。秋山は、子どもが自発的に口ずさむ歌に関して、遊び歌の割合がほぼすべてのクラスにおいて 40～50%を占めていることを明らかにした。しかしながら、秋山の調査は、伝承あそびとしてのわらべうたについては論文の直接的な課題でないため、わらべうた遊びが遊び歌全体の何割を占めているか等は明らかにされていない。

筆者は、神奈川県 K 市の新任教諭 44 人に自発的な遊び歌わらべうた遊びの現状調査を行った。自発的な遊び歌におけるわらべうたの割合は、全体の 32.7%であることを明らかにした（長谷川 2015:98-99）。ただし、この研究は、1 度行ったアンケート調査での結果であり、継続的な調査が課題であった。

本研究の独自性は、特定の地域における 5 年分のデータを整理することにある。幼児が身体を使って自発的に遊んでいる時に歌っている歌の動向をみることで、現代の子どもたちの遊びを伴う歌の現状を考察したい。

5 本研究におけるわらべうたの定義

5-1 わらべうたとは

小泉文夫（1986:9-10）は、わらべうたが、子ども達が毎日の生活の中で遊びながら歌い継いできたうたであり、わらべうたを調べると、もっとも基本的な日本音楽の特徴が、音階にしてもリズムにしても、よりはっきりと捉えられることを指摘している。

小島美子（1967:36-40）は、わらべ歌の特徴を 5 つ挙げている。第一に、子どもたちが毎日の生活の中で歌っている歌であること。第二に、クラスや地域、仲良しグループ等、遊び仲間によってだんだん広まり伝えられてゆくこと。第三に、急に流行し始めてすぐに消えてしまうような歌ではなく、ある程度長い間子どもたちの中で歌われている歌であること。第四に、誰が作ったのか、誰が変えたのかということを誰も気にしないということ。第五に、楽譜や本等の記録の類によって伝えられるのではなく、口から口へと歌いながら伝えられている歌であること。

小泉の考え方と小島が挙げた上記 5 つの特徴を鑑みると、わらべうたは、大人が作詞作曲した歌ではなく、子どもたちが毎日の生活の中でごく自然に歌い継いできた歌であり、突然流行したのではなく、ある程度長い間歌い続けられてきた歌ということができる。

本研究では、小泉と小島の考え方に則って、わらべうたを「子どもたちが毎日の生活の中で遊びながら口から口へと伝承された、ある程度長い間歌われている歌」と定義する。

5-2 わらべうたの分類

わらべうたの分類については、小泉（1967:58-62）が提唱する「からだ遊び」における遊びの種類による 9 つの「わらべうたの第一次分類」（以下、「分類」とする）に従う（表

2)。順序は0から9まで「単純なもの」から「複雑なもの」へという原則である。各分類の説明は、小島(1967:41-45)を参照する。

0「となえ歌」は、数を数えるもの、1「絵かき歌」はブツブツ言ったり歌ったりしながら絵をかくもの、2「おはじき」はおはじきや石けりしながら歌うもの、3「お手玉(羽つき)」はお手玉をしながら歌うもの、4「まりつき」は「あんたがたどこさ」のようにまりをつきながら歌う歌、5「なわとび(ゴムなわ)」は自分でなわを両手に持って飛ぶタイプとなわの持ち手が2人別について、みんなで次々に入って飛ぶタイプの2つに分かれるものがある。6「じゃんけん」は実に様々な種類のものがある。「グーチーパー」などもここに含まれる。7「お手合わせ」は、必ず「せっせっせ」のプロローグから始まる。8「からだ遊び」は遊びのためにまりやなわ、おはじきなどを使う代わりに、人間の身体の一部を道具に仕立てて遊ぶもとでいらすの遊びである。「あがりめさがりめ」「なべなべそこぬけ」などが該当する。9「鬼遊び」は、「鬼さんこちら」のような鬼ごっこ、「子とろ子とろ」のようなもの、「花いちもんめ」や「かごめ」もこれに含まれる。

表2 わらべうたの第一次分類

No.	わらべうたの分類
0	となえ歌
1	絵かき
2	おはじき
3	お手玉(羽つき)
4	まりつき
5	なわ(ゴムなわ) とび
6	じゃんけん
7	お手合わせ
8	からだ遊び
9	鬼遊び

5-3 アンケートの回答の分類方法

アンケートの回答は、自由記述にしたため、例えば「鬼決め」と書いた回答もあれば、「鬼決めジャンケン」と書いた回答もある。この場合は、小泉が提唱する表2「分類」における6番の「じゃんけん」と9番「鬼遊び」のいずれか一方でカウントする。「ジャンケン」という言葉がある場合は、6番の「じゃんけん」に分類した。その他、「鬼さん鬼さん何色ですか」という回答や「鬼ごっこするもの寄っといで」は、9番の「鬼遊び」に分類した。その他、「かごめかごめ」や「花いちもんめ」も「鬼遊び」に分類できるが、回答に「鬼」という言葉を書いていないため、独立して整理し、分類は9番とする。

上記のように、どちらにも該当しそうな場合は、回答から読み取れる優位性に準拠して、1つのカテゴリーで整理した。

「じゃんけん」については、種類が豊富なため、まず、総数をカウントする。そして、種類については、別途示す。例えば、「じゃんけんぽん」と「じゃんけんポイポイ」は、「じゃんけん」として総数のカウントは2とする。種類別では、1つずつ記入する。しかしながら、

「やきいもグーチャーパー」のじゃんけんのように、大人が作詞作曲したものについては、「じゃんけん」の中に入れずに、独立してカテゴリー分けをした。

6 5年連続で歌われている歌の結果と分析

6-1 結果

K 市内の幼稚園教諭が、幼稚園での子どもたちの様子を思い浮かべて書いたアンケート調査の中で、5年連続で挙げられた歌は、下記の通りである（表3）。

表における項目の「わらべうた」は、表2の「わらべうたの第一次分類」に当てはまる歌に○をつけた。「分類」は、表2の9つの分類のナンバーを書いた。曲名は、回答から得た曲名、2019等の年度は、アンケート調査を行った年度である。

表3 5年連続で歌われている歌

No.	わらべうた	分類	曲 名	2019	2018	2017	2016	2015	合計
1	○	9	鬼決め（おにごっこ、かくれんぼ）	44	60	32	48	37	221
2			アルプス一万尺（替え歌含む）	15	16	11	9	27	78
3	○	5	郵便屋さん	7	10	6	13	33	69
4	○	6	じゃんけん関連	11	17	18	7	10	63
5	○	9	花いちもんめ	4	22	16	10	11	63
6	○	8	なべなべそこぬけ	10	18	7	9	9	53
7	○	9	かごめかごめ	3	13	8	2	23	49
8			おまけのおまけの汽車ポッポー	6	10	5	1	21	43
9			焼きいもグーチャーパー	7	5	3	8	13	36
10	○	7	お寺のおしょうさん	5	4	11	7	7	34
11			線路は続くよどこまでも	7	8	5	2	11	33
12			むっくりくまさん	3	14	3	3	9	32
13	○	9	だるまさんがころんだ	8	9	8	1	5	31
14			さんぽ	7	7	5	1	8	28
15	○	9	あぶくたった	1	10	9	2	5	27
16			アナ雪（ありのままで）	3	8	4	2	9	26
17	○	9	この指とまれ	1	3	5	3	12	24
18			どんぐりころころ	3	6	1	2	4	16
19			アンパンマン(替え歌含む)	5	1	2	1	3	12
20	○	7	ずいずいずっころばし	0	4	3	1	4	12
21	○	0	どちらにしようかな天の神様の	1	1	2	1	7	12
22			ドラえもん	2	1	2	2	5	12
23	○	5	おおなみこなみ	1	2	1	1	6	11
24			バスごっこ	2	2	2	3	2	11
25			グーチョキパーで何作ろう	2	1	1	1	2	7
								合計	1003

6-2 分析

6-2-1 5年連続で挙げられた歌全体の中のわらべうたの割合

K 市内の幼稚園で、幼児が自由遊び等で5年連続歌っていた歌は、25曲であった。その

内、わらべうたは、13 曲入っている。

最も多く遊んでいた遊びは、鬼決め (221 名) であった。K 市で鬼遊びをする時に、よく歌われていたのが「おにきめ、おにきめ、鬼じゃないよ」と片足を出して指差ししながら、最後に残った人が鬼になるパターンであった。次に、郵便屋さん (69 名)、じゃんけん関連 (63 名)、花いちもんめ (63 名)、なべなべそこぬけ (53 名)、かごめかごめ (49 名)、お寺のおしょうさん (34 名)、だるまさんがころんだ (31 名)、あぶくたった (27 名)、この指とまれ (24 名)、ずいずいずっころばし (12 名)、どちらにしようかな天の神様の (12 名)、おおなみこなみ (11 名) であった。

上記のわらべうた 13 曲を見かけた人数の合計は、5 年間で 669 名であった。これは、全体の 67% に当たる (図 1)。

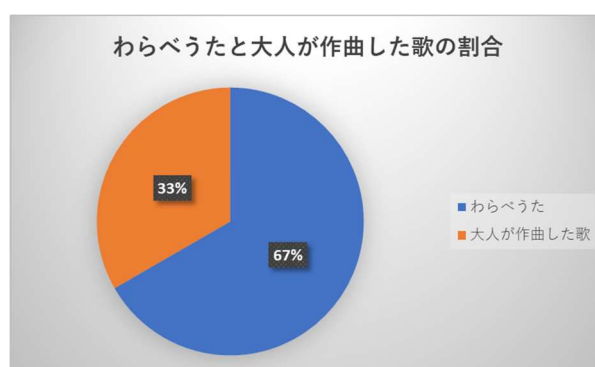


図 1 5 年連続挙げられた歌全体の中のわらべうたの割合

6-2-2 わらべうたの遊びの種類における割合

ここでは、幼児がわらべうたで遊んでいる時に、どのような遊びを好んでいるのかを小泉の「分類」(表 2) を基に分析する。まず、表 3 の分類番号別に遊びの種類を整理した (表 4)。

表 4 5 年連続で挙げられたわらべうたの種類

分類	わらべうたの種類	合計
9	鬼遊び	415
5	なわとび	80
6	じゃんけん	63
8	からだ遊び	53
7	お手合わせ	46
0	となえ歌	12

上記の結果から、幼児が自発的に遊ぶ時は、「鬼遊び」が子どもたちに圧倒的に人気があることがわかる。「鬼遊び」には、「鬼決め」や「花いちもんめ」「かごめかごめ」「だるまさんがころんだ」「この指とまれ」が含まれている。これらの遊びは、わらべうた全体の 62% を占めている (図 2)。

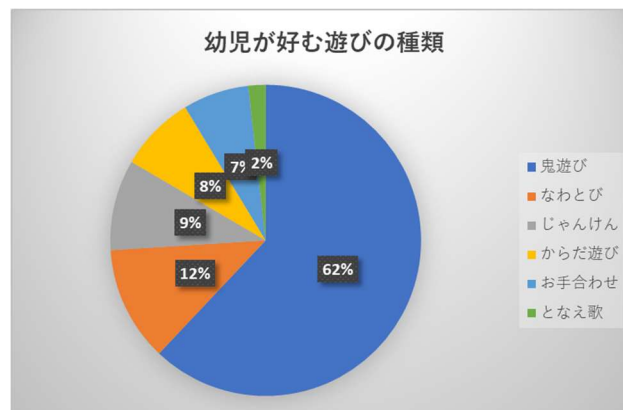


図2 5年連続挙げられたわらべうたの種類の割合

「分類」の1から4に当たる「絵かき」「おはじき」「お手玉」「まりつき」は、5年連続の歌には登場しなかった。このことから、こうした遊びは、現代において減少傾向にあるといえる。0のとなえ歌は、「かくれんぼ」や「鬼ごっこ」等の数を数える時に、子どもたちは毎日のように歌っているであろうが、幼稚園教諭がそれを歌として認識していないため、2%となっていると思われる。

6-2-3 じゃんけんの種類

表3で整理した「じゃんけん関連」には多くの種類が含まれていた(表5)。5年連続で幼児が遊んでいたじゃんけんは、「じゃんけん、はいはい(ポイポイ、ポンポン)どっち出すの」であった。

表5 じゃんけんの種類

No.	じゃんけんの種類	2019	2018	2017	2016	2015	合計
1	はいはい(ポイポイ、ポンポン)どっちだすの	2	3	2	4	2	13
2	グッとパーでわかれましょ	3	3	0	0	1	7
3	最初はグー	0	1	4	0	1	6
4	グリコのおまけ	0	3	1	1	1	6
5	じゃんけん	2	3	0	0	0	5
6	鬼決め15でジャストッピ	2	2	1	0	0	5
7	ぐっぱー	0	0	4	0	0	4
8	じゃんけんポン	0	0	2	0	1	3
9	大阪じゃんけん(負けるが勝ち)	0	0	0	1	1	2
10	アメリカ(負けるが勝ち)	1	0	0	1	0	2
11	ドーンじゃんけん	0	1	0	0	1	2
12	キキララちゃん	0	0	2	0	0	2
13	鬼決めドーチン	0	0	1	0	0	1
14	鬼決めジャス	0	0	1	0	0	1
15	鬼決め赤ちゃん	0	1	0	0	0	1
16	後だしじゃんけん	0	0	0	0	1	1
17	いかりや長介カトちゃんべ	0	0	0	0	1	1
18	カレーライスじゃんけん	1	0	0	0	0	1
						合計	63

上記の結果から、「じゃんけん」と一口で言っても、幼稚園教諭が子どもたちの「じゃんけん」で遊んでいる姿を思い浮かべただけでも 18 種類もあることが明らかとなった。

7 まとめと考察

本研究では、わらべうたを「子どもたちが毎日の生活の中で遊びながら口から口へと伝承された、ある程度長い間歌われている歌」と定義した。この定義を基に、分析結果をまとめるとともに K 市内の幼稚園で幼児が自発的に遊ぶ時に歌っていた歌の何らかの傾向を考察したい。

K 市内にある幼稚園で、幼児の遊びを伴う自発的な歌として 5 年連続で歌い続けられてきた歌の中には、子どもたちが毎日の生活の中から口から口へと伝承されてきたわらべうたが 67%を占めていることが明らかとなった。この結果から、現代の子どもたちも、子どもたち同士で遊ぶ時には、自然とわらべうたを歌っていることが考察される。

わらべうたの遊びの種類における割合をみると、「鬼遊び」が 62%を占めていて、他のなわとびやじゃんけん等よりも圧倒的に多かった。この「鬼遊び」には、「はないちもんめ」や「かごめかごめ」、「だるまさんがころんだ」等が含まれている。このような傾向から、幼稚園というある程度の集団が集まった場では、幼児はわらべうたの分類の中で最も複雑な遊びである「鬼遊び」を好んで選択していることが考察される。今も昔も子どもたちにとって「鬼遊び」は魅力的なのであろう。このことから、子どもたちが集まって安心して自由に遊べる広場としての幼稚園の役割の重要性が指摘できるのではないか。

「じゃんけん」については、幼稚園教諭が覚えているものだけでも 18 種類が挙げられた。実際には、さらに多くの種類があると思われることから、子どもたちがその時々遊びの状況に応じて、じゃんけんをアレンジしていることが考察される。種類の豊富さは、子どもたちの工夫の表れとも捉えることができるため、わらべうたの奥深さや教育的な効果が期待できると考える。

これらの結果や考察から、幼小接続の総合的な学習プランを立案する時に、幼児が遊びを伴い自発的に歌っているわらべうたを中心に据えることが有効であることが示唆された。

8 今後の課題

本研究は、幼稚園教諭が幼児の様子を思い出しながら書いたアンケート調査の結果をデータの基礎とした。そのため、K 市内の子どもたちが歌っていたわらべうたが日本音楽の可変的でもあり不変的でもあるといった両面性や他律性という伝統音楽の特質と実際にどのようなつながっているかということは明らかにできていない。これらを明らかにするためには、子どもたちが実際に歌っている姿を観察し、子どもたちの遊びの息づかいや身体の動き、歌から読み取れる音階やリズム等を分析する必要がある。また、様々な生活経験の中で、子どもたちがどのようにわらべうたで遊び始めるのかといった状況も参与観察等で明らか

にしなければならない。

したがって、今後の課題は、アンケート調査の継続と、実際に保育園や幼稚園、こども園等に行って子どもたちの遊びの様子を観察・記録することである。そして、こうした研究を積み重ねることで、デューイの美的経験としてわらべうたを捉えるための理論構築や、子どもの内発的動機を大切にしたい表現教科の総合的な学習プランの立案、幼小接続、小中接続等、学びの連続性における音楽科教育の指導内容や指導方法、教材開発等を進めていきたい。

注

- (1) わらべうたを幼少接続の中心に置く発想や理論構想については、小泉文夫（1986）に端を発し、近年では尾見敦子（2017:67-84）の研究がある。尾見は、ハンガリーでは、伝承の歌遊びは音楽教育における「幼小接続」の理念と実践の双方をつないでいるが、我が国においては、音楽教育的価値についての言及が乏しいことを指摘している。

引用・参考文献

- 秋山治子 2012「今、都内の幼稚園・保育園（所）でどのような歌が歌われているか ―アンケートの集計と考察 ―」『研究年報』第 17 号 40-46
- 石川眞佐江 2014『幼児の遊び場面における歌の諸相と機能』東京藝術大学 博士論文
- 今川恭子 2009「10 年間の研究動向 ― 乳幼児と音楽教育 ―」『音楽教育学の未来―日本音楽教育学会設立 40 周年記念論文集』日本音楽教育学会編 音楽之友社 122-131
- 尾見敦子 2017「ハンガリーの幼稚園・小学校の音楽教育における 伝承の歌遊びの意義」『川村学園女子大学研究紀要』第 28 巻 第 2 号 67-84
- 尾見敦子（研究代表） 2017「音楽の協同性に着目した幼少接続の音楽活動プログラムの実証的研究」（2014-2017、MEXT/JSPS、26381225）
- 神蔵幸子・長谷川真由 2014「日本の伝統音楽の保育内容への導入と展開」『洗足論叢』第 42 号 187-196
- 九鬼周造 1979『「いき」の構造』岩波文庫
- 小泉文夫監修 1967『明治・大正・昭和 日本のわらべうた』日本ビクター（株）
- 小泉文夫 1969『わらべうたの研究 ― 共同研究の方法論と東京のわらべうたの調査報告 ―』わらべうた刊行会
- 小泉文夫 1986『子どもの遊びとうた ― わらべうたは生きている ―』草思社
- 小泉文夫 1986『おたまじゃくし無用論』青土社 9-10
- 小泉文夫 1994『音楽の根源にあるもの』平凡社
- 小島美子 1967「わらべうたは生きている」小泉文夫監修『明治・大正・昭和 日本のわらべうた』日本ビクター（株） 36-40
- 澤田篤子 1997「日本伝統音楽の学習」『学校音楽教育研究』第 1 巻 59-60

- 澤田篤子（研究代表） 2009「日本の伝統文化の特質に基づく音楽科教材の現代化」科学研究費助成事業 基盤研究（C）（2005-2008、MEXT/JSPS、17530675）
- 澤田篤子（研究代表） 2016「日本の伝統音楽文化の特質に根差した音楽科教材開発と授業プログラム作成」科学研究費助成事業 基盤研究（C）（平成 24～27 年度、MEXT/JSPS、24531158）
- 澤田篤子 2017「3 日本伝統音楽の指導内容」『日本伝統音楽カリキュラムと授業実践』日本学校音楽教育実践学会編 音楽之友社
- 永岡都・尾見敦子・小川昌文・蓮見元子・長谷川恭子 2016「（共同企画X）ラウンドテーブル『幼小接続』の鍵としての音楽教育の役割 —『音楽の協同性』に着目して—」『音楽教育学』第 46 巻 2 号 91-92
- 橋本真由（長谷川） 2008「中学生を対象とした音楽の『構成的創造活動』にみる表現内容の論理性に関する実践的研究」兵庫教育大学 博士論文
- 長谷川真由 2013「日本の伝統的な音素材による『音楽づくり』にみる指導内容・方法 —小学校低学年を対象とした出張授業の分析を通して—」『洗足論叢』第 42 号 103-113
- 長谷川真由 2015「新任教諭を対象とした園児の自発的な遊び歌に関するアンケート調査 —わらべうた遊びの現状に着目して—」『洗足論叢』第 44 号 93-102
- 東元りか・神蔵幸子 2015「保育現場における伝統的な音楽の実践と小学校音楽科カリキュラムとの関連性について」『小田原短期大学紀要』第 45 号 10-22

謝辞

本稿を執筆する上で、5 年という長きに渡り、アンケート調査の依頼を引き受けてくださった神奈川県 K 市の幼稚園協会の園長先生方を始めとした関係者の皆様、研修という限られた時間内でアンケートに協力してくださった多くの幼稚園教諭の皆様に、謝意を表します。

【報 告】

2019 年 松田昌恵 ソプラノリサイタル
～日本歌曲の演奏と解釈～

松田昌恵

I. プログラム

〈第一部〉

W.A.モーツァルト：すみれ Das Veilchen K.476

ルイーゼが不実な恋人の手紙を焼いた時

Als Luise die Briefe ihres ungetreuen Liebhabers verbrannte K.520

ラウラに寄せる夕べの思い Abendempfindung am Laura K.523

クロエに An Chloe K.524

F.メンデルスゾーン：恋する女の手紙 Die Liebende Schreibt Op.86-3

最初の喪失 Ernster Verlust Op.99-1

ズライカ Suleika Op.34-4

ズライカ Suleika Op.57-3

A.ウェーベルン：五つの歌曲 Op.4

I 序詞 Eingang

II まだ私の誠がお前を見守らせる Noch zwingt mich Treue

III そうだお前に祝福と感謝を Ja Heil und Dank dir

IV 私は苦しみの中でただ一つのことしか知らない So ich traurig bin

V お前たちは炉辺へと歩み寄った Ihr tratet zu dem Herde

〈第二部〉

別宮貞雄：『二つのロンデル』 作詩：加藤周一

一．雨と風

二．さくら横ちょう

平井康三郎：『日本の笛』より 作詩：北原白秋

祭もどり

かじめとたんぽぽ

たまの機嫌と
ぬしは牛飼
びいで びいで
閑守
追分
夏の宵月
くるくる からから

團伊玖磨：『美濃びとに』 作詩：北原白秋

- 一. うた
- 二. 秋
- 三. 閑か
- 四. 美濃びとに
- 五. 雀おどり

～選曲について

ドイツ歌曲の中でも初期のものとされるモーツァルトを選んだ。シューベルトの作品と迷うところではあったが、前回 2016 年のリサイタルではイタリア古典歌曲から選曲したこともあり、この選択となった。また、この 4 曲はモーツァルト の歌曲の中でもよく知られており、コンサートの始まりとしてふさわしいと考えた。次にロマン派の作品と考え、メンデルスゾーンとし、テキストを全てゲーテとして、統一感を持たせた。Suleika の 2 曲はこのリサイタルの前年にシューベルトの 2 曲も演奏しており、比較しながら仕上げる事ができた。ウェーベルンに取り組むのは大きな挑戦であった。これまでにベルクやシェーンベルクの調性音楽をリサイタルなどで取り上げてきたが、絶対音感のない私にとって、大変難しいもので、準備に多くの時間を費やした。根気良く練習に付き合ってくれた小坂氏に感謝する。その準備の中で、言葉と旋律やリズムの密接な関係、また、ウェーベルンの持つ音の磁場のようなものを感じることができたことは、収穫であった。

第二部の日本歌曲では、日本的な表現の求められる作品を選曲した。別宮貞雄の歌曲集は必ずしもそうとは言えない曲もあるが、プログラム構成の上での変化も考慮して決めた。平井康三郎と團伊玖磨の作品はどちらも北原白秋のテキストで、統一感を持たせた。

II. それぞれの作品についての演奏と解釈や留意点について

【W.A.モーツァルト】

ドイツリートにとってシューベルトの果たした役割は大きい。モーツァルトは声楽の分

野では歌曲というより、オペラの世界が評価されているのは周知のことだ。簡易な伴奏がついているものが多く、いわゆる芸術歌曲と言われるものは少ない。今回取り上げた 4 曲は其中でもよく歌われているものばかりである。以前、モーツァルトの時代のピアノで *Abendempfindung am Laura* を歌った経験があるが、とても刺激を受けた。この曲が 2/2 拍子で書かれていることにそれまで違和感を覚えていたが、当時の楽器と共演することで、よく理解できた。今回のリサイタルでは現代の楽器との共演であるが、この経験をもとに演奏することを心がけた。

また、この 4 曲の内容には何の関連性もないのだが、リハーサルを重ねるうちに、それぞれの曲にモーツァルトオペラの登場人物が当てはまるように感じられてきた。*Das Veilchen* は Zerlina、*Als Luise die Briefe ihres ungetreuen Liebhabers verbrannte* は Elvira、*Abendempfindung* は Contessa、*An Chloe* は Cherubino など、自分でも不思議な感覚だった。

【F.メンデルスゾーン】

ドイツリートの大恩人のシューベルトをプログラムに入れなかったが、ロマン派の作曲家としてメンデルスゾーンを選んだ。4 曲ともシューベルトも作曲しているゲーテの詩によるものだ。改めてドイツ語の持つリズム感が旋律、リズムと密接な結びつきがあることを再認識させられた。このことが、ウェーベルンの演奏にも大いに生かされたように思う。一見平易で聞きやすく感じるメンデルスゾーンの作品だが、演奏する側からは一筋縄ではいかない難しさがあるように思う。ピアノのパートと音をぶつけて解決することが多く、それが何気なく隠されており、そこをことさら強調もせずを感じながら曲を進めることで、曲の深みが増すように努力した。これもまた、ピアノとのリハーサルのたびに発見があり、充実したリハーサルができたと思う。また、こうした技法は、バッハの蘇演で知られるように先人の研究に余念のなかったメンデルスゾーンの面目躍如といったところだろう。

【A.ウェーベルン】Op.4

新ウィーン楽派の 1 人であるウェーベルンの 1908 年から 1909 年に作曲された作品。師であるシェーンベルクの影響を大きく受けていることがわかる。それは作風にも詩人の選択にも表れている。調性音楽から離れて新しい世界を開こうという意欲的な試みが感じられるが、そのことが、絶対音感を持たない私には大きな壁となっていて、これまでこの類の作品を取り上げずにきた。新ウィーン楽派の 3 人の作曲家の中で最初に演奏したのはベルクの〈七つの初期の歌〉で、1996 年のデビューリサイタルで歌っている。初めてこの歌曲集の第 1 曲目の *Nacht* 夜 を聞いた時の衝撃は今でも忘れられない。そこから全 7 曲の全容を知って、調性音楽がぎりぎりのところで持ちこたえながら、危うくも怪しげに輝かしい光を放っていることに感動したものだった。その後、シェーンベルクの Op.2 を取り上げ、やはり、クリムトの黄金色の絵画を彷彿とさせるようなロマン派の最後の眩い輝きを堪能

した。そして、今回のウェーベルンの Op.4 に取り組むことになった。

共演のピアニスト小坂氏は現代音楽の演奏にも長けていて、この作品も数度目であったこともあって、多くの刺激を受けながらのリハーサルが続いた。6 分余りの短い作品だが、リハーサルには多くの時間が費やされた。調性音楽ではないのだが、それぞれの曲には、核となる一つ音の磁場のようなものがあると感じられるまでには時間を要した。(根気よく私の練習につきあってくれた小坂氏に感謝する)

前回 2016 年のリサイタルで取り上げたピッツェティは調性を放棄しているわけではないが、それぞれの曲に音の磁場のようなものを感じていたが、ウェーベルンではいよいよ調性は放棄され、その感を強くした。旋律というよりドイツ語の持つ抑揚とリズムが大きく支配していることもあって、音程をつける前にリズムで言葉を読むことも多く取り入れた。

【別宮貞雄】 <二つのロンデル> 加藤周一 詩

メシアンの研究でも名高い別宮貞雄のこの歌曲集は歌曲集として演奏されることは少なく、もっぱら「さくら横ちょう」のみが演奏されている。“マチネポエティック”の様式に則ったテキストは、作曲者のこのみにあっていたのではないかと思われる。規則正しい脚韻を踏むこのテキストに刺激を受けて、楽曲も大変理論的に書かれているように感じる。

1 雨と風[Allegro vivace]

この曲では、2 曲目の「さくら横ちょう」のロマンティックな内容とは対照的なシニカルな内容で、この類の日本歌曲は珍しく、表現するのは難しかった。また声楽的な生理からはギャップを感じたこともあった

2 さくら横ちょう[Adagio]

1 曲目とは対照的なロマンティックな恋の思い出を歌うこの曲は、大変よく歌われており、作曲者本人が「さくら横ちょう以外にも作品はあるんだが～」と生前仰っていたくらいだ。1 音をメリスマティックに引き伸ばし、その歌いまわしや音色を工夫することで、より深みのある歌唱になるよう努力した。また、<思い出す～>からの部分にはピアノの左手にハバネラのリズムを用いて、ビゼーのオペラ『カルメン』のカルメンの歌うハバネラが想起される。このことから、このテキストに出てくる女性がカルメンとイメージが重なっていると思われる。

【平井康三郎】 『日本の笛』より 北原白秋 詩

全 21 曲からなる歌曲集から 9 曲を選んで演奏した。歌曲集と言っても一つの物語などがあるわけではなく、1 曲目から 13 曲目までは八丈島などの南方の島が舞台で、14 曲目から突如信州に舞台を移すという大変ユニークな歌曲集である。今回のリサイタルでは、13 曲目までの南方の島を舞台とした曲から 9 曲を選んでいる。また、明らかに男性が主人公の

ものと女性が主人公のものが入り混じっており、このこともこの歌曲集の趣きを深くしている。

＊祭もどり〔純情で〕 昔から日本でみられてきた祭りの夜の男女の出会いを歌ったこの曲では、若い娘の初心な恋心を母親に打ち明ける甘酸っぱさを表現した。

＊かじめとたんぼぼ〔しめやかに〕 1 曲目で歌われた世界に比べて、春の終わりの物憂さが歌われており、1 曲目との違いを鮮明にするように心がけた。

＊たまの機嫌と〔いきに〕 朝の虹のように今は機嫌がよいが海が急に時化るように機嫌が悪くなってしまわないかと気を揉んでいる。10 小節しかない歌の部分にテンポの変化があり、歌い切りの音に 8 部音符が付されており、テヌートしながらも短く置くように歌うなどして、粹な雰囲気を出すようにした。

＊ぬしは牛飼い〔軽妙に速く〕 前曲のくたまの機嫌と＞同様にテンポの揺れの指示に従って、男女のかけ引きの様子を面白味を持って表現するようにした。テンポの揺らし方は、日本の伝統音楽から学ぶことが大きかった。

＊びいでびいで〔可憐に〕 題名のくびいでびいで＞はブーゲンビリアのことをさし、燃えるような赤い花が咲くという。1 曲目の祭もどり同様、実らなかった恋の歌だが、可憐さと明るさを失わないようにからりと歌うように心がけた。

＊関守〔戯けて〕 まるで関所の関守のように山羊や瑠璃鳥が出てくるというユーモラスな 1 曲。1 拍子的な感覚を取り入れて、表現してみた。

＊追分〔あかるく、味を以って〕 ピアノは前奏から尺八を模しており、歌には江差追分が取り入れられ、江差追分を聞くなどして参考にした。日本的なクレッシェンドやデクレッシェンド、こぶしのような前打音の扱いなどを工夫した。

＊夏の宵月〔やわらかに流れて〕 作曲者が「南国のセレナーデ」とこの曲を言っているように、ピアノはギターを模して書かれており、歌は、のびやかに旋律を歌うように心がけた。

＊くるくる からから〔軽快に〕 南方の島を舞台にした最後を飾るこの曲は、爽やかに、のどかに、のびのびと歌うことを心がけた。特にあ母音の持つ明るさを損なわないように注意した。

この歌曲集はどの曲も1分前後の曲ばかりだが、1曲毎に趣きがあって歌っていても大変楽しいものだった。西洋音楽の様式で書かれていながら、白秋の日本的世界がよく表現されていると感じた。

【團伊玖磨】 『美濃びとに』 北原白秋 詩

團伊玖磨の歌曲は日本歌曲の大切なレパートリーの一つである。この歌曲集は演奏される機会が多いとは言えないが、團伊玖磨の歌謡性をよくあらわしており、演奏の機会が増えることを願うところだ。

この歌曲集全体を通して、ほのぼのとしたのどかさと大らかさを感じる。〈三つの小唄〉にも日本的な情緒を感じるが、そこで歌われている日本的情緒とも質の違いがある。團作品からいつも感じる都会的な洗練された美とは趣きを異にして、この歌曲集からは「美濃」という一地方の匂い、土の匂いを表現することに成功していると感じる。それは、ピアノパートに完全音程を多用して独特の響きを醸し出していることが大きな要因ではないかと考える。歌はその響きに切り込むように歌ったり、寄り添って溶け込んだりしながら、時々の変化を見せるように心を砕いた。そういう意味でも、ピアノ合わせでのインスピレーションは大きな収穫があった。

山田耕筰作品と同様に團伊玖磨作品を多く歌ってきたが、新たな発見があった。

1 うた[Andantino] 「よいにほひ」とテキストにあるように、柔らかで捉え難いがくっきりとした線のように旋律を描くよう苦心した。

2 秋[Allegretto] 1曲目とは対照的に「鳴が立つ」というテキストで始まるこの曲では、きっぱりとした印象を歌い出しで感じ取ってもらえるように8分休符の前の音の扱いや子音の立て方に留意した。

3 閑か[Andante] この曲では、2度や3度の下降の狭い音程幅でグリッサンドが要求されており、日本的なずり下げを試みた。團作品に多用されるフレーズの終わりの長い音価でのクレッシェンドやデクレッシェンドも発声上の工夫が求められた。

4 美濃びとに[Andante sostenuto] この歌曲集の題名となっている曲だが、「ほうい ほうい ほうい / 霧が濃いぞ、 / 鶉よ」という短いテキストで、「ほ」を長く引き伸ばしており、「お」母音の持つ柔らかさや暖かさを表現したいと考えた。そのことで、この歌曲集の持つ大らかさや豊かさの表現に結びつけたいと思った。

5 雀おどり[Allegro scherzando] この歌曲集を締め括るにふさわしい華やぎを持った曲であり、日本民謡の伝統に則っている。「ありやせ こりやせ / ありや、りゃん、りゃん、

りゃん」などの掛け声の部分も明るく賑やかに歌うよう努めた。

Ⅲ. 終わりに

日本歌曲の研究をテーマとしているが、2016 年のリサイタル同様、今回も前半に外国語の歌曲をプログラミングした。それぞれの言語の持つ特徴をふまえて発語や歌唱表現などを研究していくと、日本語の歌唱表現にも大いに参考になると再確認できた。

平井康三郎の歌曲集『日本の笛』は今回のリサイタルでは抜粋して演奏したが、近い将来、全曲を演奏したいと思っている。また、他の言語の歌曲との組み合わせも考えてみたい。

アンコールには、平井康三郎：秘唱、團伊玖磨：藤の花、越谷達之助：初恋 の 3 曲を演奏した。

【報 告】

2019 年度「油井美加子ピアノリサイタル」

－ 作品におけるピアノリズムと心象の融合 －

油井美加子

【はじめに】

作品を音楽的に表現するためには様々なピアノリズムが求められる。「音による思想」を心の礎としていたショパンの音楽には、ピアニストにとっての大きな課題である美しい伸びのある音色を表現するためのしなやかさを備えた技術、またラヴェルでは声部間の精緻な対話、打鍵のスピードの多様性等、作曲家によってそれらは非常に多岐にわたるものである。今回のリサイタルに臨み音質を追求する上での指針となったこれまでの経験によって培われた学びについて述べたい。

《Program》

ショパン 2つのノクターン作品 27
 スケルツォ第2番 変ロ短調 作品 31
 舟歌 嬰へ長調 作品 60

ラヴェル 水の戯れ
 亡き王女のためのパヴァーヌ
 クーブランの墓

【1985 年 初めてのフランス】

初めてフランスを訪れたのは二十歳の夏。パリ・エコールノルマル音楽院のサル・コルトーに於いて、ラヴェルに師事し、彼の作品解釈の第一人者として知られたピアニスト、ヴラド・ペルルミュテール氏の公開レッスンを受講した。当時 81 歳のペルルミュテール氏の指先から繰り出される瑞々しく美しい音色、溢れるほどの豊かな熱量、それでいて自然に語りかけてくるその音楽は、私にはまるで魔法のように感じられた。

ドビュッシーの『水の反映』を他の受講生が弾いたときのこと。賞賛する言葉をかけながら、「こんな風に弾いてみたら？」とペルルミュテール氏が鍵盤に指を置いた途端、眼前に

緑に囲まれた池のほとりが現れ、どこからか吹き込んできた風が水面の表情をみるみるうちに変化させていく…。『音で描く原風景』が広がっていくのが確かに見えたような驚き、「ピアノリズムと心象の融合」を初めて体感することができたその瞬間は、音楽のみならずその後の私が印象主義への興味を大いに掻きたてられるきっかけとなった。

【2004 年 パリでの研修】

大阪音楽大学の長期特別研修制度による 2004 年度のパリでの研鑽の日々は、人生において何にも代えがたい貴重な時間となった。朝起きてから夜眠りにつくまで、「音楽と向き合うゆとり」があり、演奏技術は勿論のこと「五感と音楽」の密接な関連性をあらためて真摯に考える機会となった。

恩師ジェルメーヌ・ムニエ氏⁽¹⁾の指導は、作品への深い洞察力、音楽を追求する真摯な眼差しに満ち、凜とした厳しさの中にも愛情があふれていて、演奏者・指導者としてあるべき先生の姿や懇切丁寧に教示戴いた言葉は私の中に息づいている。

「音を聴くことができているのか？」

「豊かな響きを創るために必要なことは？」

「歌わせるための呼吸とは？」

「楽譜から読み解くためには？」

自問自答を繰り返しながらひたすらピアノに向き合う日々。「音楽と向き合うゆとり」は、「根底から演奏を見つめ直さねばならない悩み」へと直結したが、この経験は演奏や後進を指導していく上の私の指針として現在に繋がっている。

【作曲の背景*・演奏における留意点】

*作曲の背景については筆者自身によるプログラムノートの一部改稿

ジョン・フィールド（1782-1837）が創始した「夜想曲」（ノクターン）の作風に感化され、ショパン（1810-1849）は 20 歳から晩年にわたって全 21 曲のノクターンを作曲した。

《2 つのノクターン 作品 27》は故国ポーランドからパリに移り住み、名声を確立し始めた 1835 年に書かれた。同年 8 月にチェコの温泉保養地カールスバートで人生最後となる 5 年ぶりの両親との再会は幸福を、パリへの帰途での友人の妹マリア・ヴォジンスカとの再会は恋という喜びをショパンの心に湧かせた。

・憂愁に満ち、荘重な世界観を表現した嬰ハ短調 ラルゲット、4 分の 4 拍子、3 部形式。

・優雅で洗練された旋律と精緻な装飾音で彩られ、広く愛されている変二長調 レント・ソステヌート、8 分の 6 拍子、ロンド形式。

オーストリア駐仏公使夫人であったダポニー伯爵夫人への献呈から、「貴婦人の夜想曲」との呼び名もあるこの2つのノクターンはそのコントラストも素晴らしい。

再会から1年後にプロポーズを受け入れたマリア。だがショパンの健康状態を憂慮した両親の反対もあったのであろうか、翌1837年初夏には彼女からの別れを告げる手紙が届く。マリアとヴォジンスキ家からの手紙の束をリボンでまとめ、「我が哀しみ *Moja bieda*」と記し封印。彼の心情が吐露しているようにもうかがえるのがこの年に完成した《スケルツォ第2番 変口短調 作品31》。イタリア語で「冗談」を意味するスケルツォは、ハイドンやモーツァルトからソナタを継承したベートーヴェンが、舞踏楽章においてメヌエットに代わるものとして導入し発展させた様式であるが、ショパンはそれまでの概念にとらわれることなく、より自由な表現方法を用いている。不穏な響きと噴出するエネルギーに満ちた応答の第1主題、美しく流麗な第2主題、静かに祈りを捧げる賛美歌のような中間部を経て、明るい躍動感溢れる旋律の再現部から煌めくコーダで締め括る3部形式である。

1846年の夏、フランスのノアンの館で完成した《舟歌 嬰へ長調 作品60》。ジョルジュ・サンドとの埋めることのできない亀裂により、心身ともに疲労困憊していた背景でありながらも、この曲での美しく悠然としたフレーズの抒情的な展開からの見事な昇華は、ショパンの魂の浄化が音へ託されたもののように聴こえてならない。

◇ショパンでは調性や作風のコントラストに着目して選曲し、特に以下の二点に着目した。

- 歌う音をつくる～音価を保持して響かせるために
- 自然なフレージング～音の方向性を明確に表現するために

「打鍵時から音が減衰する楽器の構造上、響きを保持して音の繋がりをつくることは何よりも大切であること」を意識するように、日頃から学生達にはこの様に語りかけている。「音価をもっとイメージして弾いてごらん。声に出して母音の伸びを伝えるつもりで！」これまで半世紀近くピアノを学んできた私にとっての一番の課題が『歌う音』を創ることであった。この大きな壁につきあたった十代の頃、どうすれば音が伸びるのだろうと途方に暮れて鍵盤を見つめ、ああでもないこうでもないひたすら一音一音タッチ（打鍵）を繰り返し必死に耳を傾けて模索していた。

「歌う」という思いが発信されて、「バランス良い脱力」によってエネルギーが伝わり、豊かな響きを生むことは理想であり、今後も弾き続ける上で永遠に臨むべき課題である。全身の重心に対する意識を持ち、脱力に努め、一音一音の響きの確認を信条として、指先の据わりが音の伸びやかさに結びつくまで繰り返される試み。特に緩徐的な表現では打鍵のタイミングや角度への工夫に根気強く取り組むことが必要となった。

練習に少しばかり疲れてしまった時などは、以前ポーランドを旅した折に現地の知人からいただいたお土産のショパンの左手のブロンズ像を眺めてみることにしている。すると彼の名言が囁きかけてくるようだ。『毎朝、非常にゆっくりのテンポで練習し、指をしなやかにしなさい。』リストのような特筆すべき大きさではないが、細く長い指先や確固たる関節等、その手姿からはショパンの音色の神髄を支えているしなやかな動きが浮かびあがり、また音色を求めたい思いに駆られて練習を再開することとなる。

1. 『自分の耳が許す音だけが音楽である』というショパンの言葉に込められた意味
2. 楽譜の意図するところを忠実に再現すること
3. 音楽の生命線であるアーティキュレーションの表現

以上の三点についても今後さらに深めていきたい。

◇リストの《エステ荘の噴水》から影響を受け、ラヴェル（1875-1937）がパリ音楽院在学中 26 歳の時に親愛なる師ガブリエル・フォーレに献呈された《水の戯れ》。冒頭には「水にくすぐられて微笑む河の神」と象徴派詩人アンリ・ド・レニエの一節が掲げられている。「1901 年に完成した《水の戯れ》は、私の作品のなかに認めてもらうことができたピアニスティックな新しさすべての始まりである。水のさざめきや、噴水、滝、せせらぎに聴く音楽的な音から着想を得た作品で、ソナタの第 1 楽章風に 2 つのモティーフに基づいているものの、古典的な調の配置に縛られていない。⁽²⁾」ラヴェル自身がこう語ったとおり、斬新な響きとして音楽界に新風をもたらし、印象主義を台頭するピアノ作品となった。

1899 年に書かれ、水の戯れとともに初演を迎えた《亡き王女のためのパヴァーヌ》は 16 世紀初頭のスペインに起源をもつ宮廷舞曲であるパヴァーヌの主題が、2 つのエピソードをはさんで荘重なリズムと典麗な流れで運ばれてゆく。infante はスペイン語の infanta でスペイン王室の皇女を意味し、誰のことをさすのかは不明とされているが、「これは亡くなった王女の葬送の哀歌ではなく、その昔、ベラスケスが描いたような、スペインの宮廷で、王女が踊ったようなパヴァーヌを喚起するものです。⁽³⁾」とのラヴェルの言葉にあるように、17 世紀スペインの宮廷画家ベラスケスが描いたマルガリータ王女の肖像画（ルーヴル美術館所蔵）から靈感を得たという説もある。またラヴェル自身はこの作品の欠点を認め辛辣な言葉を連ねながらも、1910 年に管弦楽曲への編曲を手がけたのは愛着があったからであろうか。ちなみにラヴェル自身は infante défunte という韻を踏む語調がお気に入りであったとか。

《クープランの墓》はフランス 17 世紀の大作作曲家フランソワ・クープランへのオマージュとして 1914 年から 1917 年にかけて作曲されたラヴェル最後のピアノ独奏曲である。1917 年はラヴェル自身が病気で除隊し、最愛の母を亡くしてしまう人生最大の試練となる悲しみに打ちひしがれた年となった。

「トンボー（墓）」とは17世紀に用いられた死者の思い出のために書かれた音楽に記された名称で、この作品はプレリュード（前奏曲）、フーガ・フォルラーヌ・リゴードン・メヌエット（4つの舞曲）・トッカータという6つからなる組曲である。各曲の冒頭には「～の思い出に」と第一次世界大戦で戦死した友人の名前が記されている。そこには彼らへの哀悼とともに、フランス音楽の伝統への誇りを表現しようというラヴェルの強い意思が在るようだ。けれども彼は音楽の中でその思いをあからさまに主張するのではなく、古典形式という衣装を纏って、典雅に踊り、クリスタルな美しい響きをきらめかせている。

墓碑銘に捧げられた可憐な花々は美しく咲いているだけで、涙など決して流していないのではないのでしょうか…ラヴェルがこう語りかけてくれている様に私には感じられる。

◇ラヴェルでの4つのポイント

- 技巧に走るのではなく、すべての音の存在感を意識する。
- 音の方向性を考えてより立体的に、かつ自然なフレージングを創る。
- 呼吸をなにより大切に感じる。
- Image（イマージュ）による光彩を音で描写する。（次項参照）

フランス印象主義の先駆けとなった《水の戯れ》、和声の精緻な構造と古典形式の中にラヴェル独自の新しい方向性を示した《クーブランの墓》。二十代から弾き続けてきたこれらの作品では、どのように微細な音価であっても存在感ある音質を求めること、ラヴェルの記譜への忠実な再現力、可能な限り声部の拡がりを想像しての表現、フレージングで的確な呼吸感を活かすことなどに重点を置いて臨んだ。また数少ないながら古典舞踊の経験によって実際の身体の動きとリズムの関連性を知り、呼吸感やフレージングへの理解が深まったことを付記したい。

【Image についての記憶】

パリから南西へ車で1時間ほどのモンフォール・ラモリー村にある後半生16年を過ごしたラヴェルの家を、これまでに初秋と早春の二度訪れた。のどかな田園地帯を通り抜け、石畳の坂を上った小高い丘に佇む三角屋根の塔がアクセントの細長いラヴェル邸。室内へ入ると彼自身が描いた壁の装飾画、東洋への興味を偲ばせる陶磁器の数々、浮世絵など蒐集した細々とした玩具などが精巧な調度品とともにバランスを保っている。狭い廊下の一番奥はピアノの部屋。柔らかな斜光が射し込む部屋で彼のピアノに触れたときの感激をどう表現すべきであろうか…。彼が暮らしていたころの余韻や、エスプリを音に真摯に求め続けた思いが時空を超えて伝わってくるように感じられた。「Le Belvédère 展望台」と名付けられたラヴェル邸のピアノ室のバルコニーからのランブイエの森の眺望の素晴らしさはいつまでも忘れることができない。

ある秋の日、ドビュッシーの前奏曲集 2 巻からの 2 曲目『枯葉』を弾いた後、次の曲を続けて弾こうとする私の手をムニエ先生がとめた。練習の徹底を常におっしゃる先生から、「よく弾けているわ。もう練習はしなくてよいから、あなたは町を歩いていらっしやい。」「えっ？」と戸惑う私に、「五感すべてを使って何かを感じとっていらっしやい。ピアニストという音ではなく、詩人や画家になったつもりで秋の薫りを創るために歩いておいで。」今もこの作品を弾く度、パリの町中をあてどなく歩き回ったこと、行き着いた公園で枯葉を踏みしめた感触、ベンチに座り空を見上げてため息をつく私を包んだ空気の匂いが蘇る。音質を求めるといことはこういうことなのかと自分に問いかけてもみたが、すぐに答えは見つからない。けれども真摯に追い求めた五感の記憶が表現に活かされることは確かだと思える。

研修を終えて再び渡仏してのレッスンは、呼吸感をうまく表現できない私にとって、これまでない最も厳しい内容となった。レッスン後、意気消沈する私にムニエ先生は「Mikako、今日のレッスンはあなただけに言った言葉ではなく、あなたがこれから教える生徒さんたちにしっかり伝えてほしいためのものなの。だからこそ真剣に厳しく伝えたわ。時間を大切に、日本へ戻ってからあなたに続く人たちに必ず伝えていって頂戴ね。」翌年天寿を全うされた先生からの最後の言葉は今も胸に深く刻まれている。

【まとめ】

A・コルトーはショパンの作品を校訂した楽譜の序文において“素晴らしく、抒情的に極めてイタリア風に響き渡る（中略）それは優しく、高貴なハーモニーの上に高く舞う。神秘的な高まりを思わせる⁽⁴⁾”という舟歌についてのラヴェルの言葉を引用し、テクニクにとらわれがちになるのではなく音への感情の必要性を強く示唆している。

水や空気、風や香りなど自然界の情景や絵画、文学、詩などからインスピレーションを受けて書かれた標題音楽や印象主義の音楽には五感をともなう表情が音に託されている。技術面の研鑽や楽譜から読み解くことの重要性は勿論のこと、五感を研ぎ澄ませてあらゆる角度からの音色探しに今後も精進していきたい。

今回のリサイタルではレパートリーの拡充とともに、私にとっての分岐点といえる時期に学んだ作品に向き合った。当時は気づけなかったことが今になってやっと胸にストンと落ちる感覚となり、新しい発見へ導くことを実感している。記憶は時間の経過とともに色褪せていくものではなく、さらに色濃く心に反映することを知り、これまで師事した先生方へのあらためての感謝とともに後進に伝えていきたい思いがより一層深まった。

最後に長期研修での貴重な経験が指針となった今回のリサイタルにあたり、研究助成を認めていただいた大阪音楽大学に心より深く感謝申し上げたい。

【脚注】

(1) Germaine Mounier (ジェルメーヌ・ムニエ)1920年2月7日－2006年6月27日

*パリ国立高等音学院名誉教授・エコール・ノルマル・ドゥ・ミュージック教授。パリに生まれ、マグタ・タリアフェロ、マルグリット・ロン、イーヴ・ナット、ヴァルター・ギーゼキング各氏に師事。パリ国立高等音学院卒業。在学中「水の戯れ」の演奏を作曲家ラヴェルが称賛した逸話を持つ実力の持ち主。演奏家として活躍する一方、パリ国立高等音楽院教授の在任中“プルミエ・プリ”卒業生数に歴史的実績を誇る。ブゾーニ国際コンクール、チャイコフスキー国際コンクール、ショパン国際コンクール他多くの国際コンクール審査員を歴任。ブルガリア・ソフィア大学名誉博士。パリ・ショパン協会副会長。

*『ドビュッシー ピアノ作品集 4 ニュー・スタンダード・ピアノ曲集』より

(2) 別宮貞雄 1993『ラヴェル 名曲解説ライブラリー』より ラヴェルの生涯と芸術
音楽之友社 p.7

(3) 井上さつき 2019『ラヴェル』 音楽之友社 p.221

(4) A・コルトー監修、八田惇翻訳・校閲 2007『ショパン 作品集第1集』
全音楽譜出版社 p.25

大阪音楽大学大学院音楽研究科
修士作品の曲目及び修士作品に関する論文の題目
修士論文の題目
修士演奏の曲目及び修士演奏に関する論文の題目
(2019 年度)

修士作品の曲目及び修士作品に関する論文の題目

1. 作曲専攻(作曲) 武田 拓
(演奏曲名)
「宮沢賢治の詩による 3 つの幻想」

(論文名) 歌曲における詩と音の関係

修士論文の題目

2. 作曲専攻(音楽学) 阿部 宗和
(論文名)演奏慣習に基づく鍵盤楽器作品の解釈
—古典派の作品における実践と演奏効果—

修士演奏の曲目及び修士演奏に関する論文の題目

3. 声楽専攻(オペラ) 乾 彩子
(演奏曲名)
Vincenzo Bellini ヴィンチェンツォ・ベッリーニ
LA SONNAMBULA

(論文名) ベッリーニのオペラ《夢遊病の女》における夢遊病の解釈について
4. 声楽専攻(オペラ) 岡田 彩菜
(演奏曲名)
Gaetano Donizetti ガエターノ・ドニゼッティ
POLIUTO

(論文名) G.ドニゼッティの歌劇《ポリウト》～ヒロイン・パオリーナの人物像～

5. 声楽専攻(歌曲) 米田 光沙
(演奏曲名)

Richard Strauss リヒャルト・シュトラウス

《最後の葉》から8つの詩 作品10より / 《Letzte Blätter》op.10

献呈 Zueignung

何もない Nichts

万霊節 Allerseelen

《5つの歌曲》作品32より / 《Fünf Lieder》op.32

僕は愛を抱く Ich trage meine Minne

愛の賛歌 Liebeshymnus

《クレメンス・ブレンターノの詩による6つの歌曲》作品68より

/ 《Sechs Lieder nach Gedichten von Clemens Brentano》op.68

夜 An die Nacht

私は一本の花束を作りたかったの Ich wollt ein Sträusslein binden

こんには、愛らしいミルテよ Säusle, liebe Myrthe

私にあなたの歌が響いたとき Als mir dein Lied erklang

(論文名) R.シュトラウスの歌曲 作品68について～時代背景から読み解く詩と音楽の関係～

6. 声楽専攻(歌曲) 上野 ゆう
(演奏曲名)

Georg Friedrich Händel ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル

《9つのドイツアリア》より / 《Neun Deutsche Arien》

戯れる波のきらめく輝きは Das zitternde Glänzen der spielenden Wellen HWV 203

甘い静けさ、優しい泉よ Süße Stille, sanfte Quelle HWV 205

霊よ、神をほめ歌え Singe Seele, Gott zum Preise HWV 206

私の魂は見ながらにして聴く Meine Seele hört im Sehen HWV 207

快い茂みの中 In den angenehmen Büschen HWV 209

燃えたつ薔薇、大地の飾り Flammende Rose, Zierde der Erden HWV 210

(論文名) G.F.ヘンデル《9つのドイツアリア》について～ヘンデルの音楽とブロッケスの詩の関係

7. 声楽専攻(歌曲) 加護 翔大
(演奏曲名)

Vincenzo Bellini ヴィンチェンツォ・ベッリーニ

《3つのアリエッタ》 / 《Tre Ariette》

燃える思い Il fervido desiderio

我がフィッレの悲しげな姿 Dolente immagine di Fille mia

銀光放つ美しき月 Vaga luna che inargenti

《6つのアリエッタ》より / 《Sei Ariette》

だがやはり満たしておくれ Ma rendi pur contento

Gioachino Rossini	ジョアキーノ・ロッシーニ
最後の思い出	L'ultimo ricordo
Gaetano Donizetti	ガエターノ・ドニゼッティ
一滴の涙	Una lacrima

(論文名) ヴィンチェンツォ・ベッリーニの歌曲作品について ―《三つのアリエッタ》を中心に―

8. 声楽専攻(歌曲) 竹内 亮
(演奏曲名)

Franz Liszt フランツ・リスト

《シラーのヴィルヘルム・テルより 3 つの歌曲》 / 《Drei Lieder aus Schillers Wilhelm Tell》S.292/2

漁師の少年 Der Fischerknabe

羊飼い Der Hirt

アルプスの狩人 Der Alpenjäger

《ペトラルカの 3 つのソネット》 / 《Tre sonetti di Petrarca》S.270/1

平和が見つからず、さりとて戦う気にもならず Pace non trovo, e non ho da far guerra

祝福あれ、あの日、あの月、あの年 Benedetto sia 'l giorno, e 'l mese, e 'l anno

私はこの地上で天使の姿を見た I' vidi in terra angelici costumi

(論文名) リストの《ペトラルカの 3 つのソネット》

～初版と第二版の違いに見られるリストの歌曲観の変化

9. 声楽専攻(歌曲) 辻 貴久子
(演奏曲名)

Johann Friedrich Reichardt ヨハン・フリードリヒ・ライヒャルト

ミニョンの歌 ―その国をご存じですか― Kennst du das Land

Ludwig van Beethoven ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン

ミニョン Mignon

Franz Schubert フランツ・シューベルト

ミニョンの歌 Mignons Gesang

Peter Ilych Tchaikovsky ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー

ミニョンの歌 Mignons Lied

Hugo Wolf フーゴ・ヴォルフ

ミニョン I, II, III Mignon I, II, III

ミニョン Mignon

(論文名) ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』より

ミニョンの歌《その国を知っていますか?》 ―ツェルター、シューベルト、ヴォルフの比較―

10. 器楽専攻(ピアノ) 秋山 里菜
(演奏曲名)

C.シューマン

スケルツォ 第1番 ニ短調 op.10

スケルツォ 第2番 ハ短調 op.14

R.シューマン

ノヴェレッテン op.21 より 第1曲 ヘ長調

フモレスケ 変ロ長調 op.20

第1部 Einfach

第2部 Hastig

第3部 Einfach und Zart

第4部 Innig

第5部 Sehr lebhaft

第6部 Zum Beschluss

(論文名) R.シューマンの音楽におけるフモール(Humor)の意味〜《フモレスケ》作品20を中心に〜

11. 器楽専攻(ピアノ) 大出 海
(演奏曲名)

F.リスト

「巡礼の年 第3年」S.163 より エステ荘の噴水

伝説 S.175 1. 小鳥に説教するアッシジの聖フランチェスコ

2. 波を渡るパオラの聖フランチェスコ

灰色の雲 S.199

イゾルデの愛の死 S.447

(論文名) リスト作品の多面性についての考察 ――〈エステ荘の噴水〉を例に――

12. 器楽専攻(ピアノ) 篠原 来実
(演奏曲名)

F.シューベルト

4つの即興曲 D899 (op.90)より 第3番 変ト長調

3つのピアノ曲 D946

第1番 変ホ短調

第2番 変ホ長調

第3番 ハ長調

(論文名) シューベルトの後期ピアノ曲でのドラマツルギー ―《3つのピアノ曲》D946を中心に―

13. 器楽専攻(ピアノ) 清水 悠宇

(演奏曲名)

M.モシュコフスキ

幻想曲「シューマンを讃えて」変ホ長調 op.5

R.シューマン

謝肉祭 op.9

- | | |
|---------------------------|----------------------|
| 1. 前口上 | 11. キアリーナ |
| 2. ピエロ | 12. ショパン |
| 3. アルルカン | 13. エストレラ |
| 4. 高雅なワルツ | 14. 再会 |
| 5. オイゼビウス | 15. パンタロンとコロンビーヌ |
| 6. フロレスタン | 16. ドイツ風ワルツ |
| 7. コケット | 17. パガニーニ |
| 8. 返事 | 18. 告白 |
| ースフィンクスー | 19. プロムナード |
| 9. 蝶々 | 20. 休息 |
| 10. A.S.C.H.-S.C.H.A.踊る文字 | 21. ペリシテ人と戦うダビデ同盟の行進 |

(論文名) R.シューマンの音楽表現の場としての仮面舞踏会 ～《謝肉祭》Op.9 を中心に～

14. 器楽専攻(ピアノ) 藤原 麻里菜

(演奏曲名)

M.ラヴェル

高雅で感傷的なワルツ

1. モデレート・フラン
2. アッセ・ラン
3. モデレ
4. アッセ・アニメ
5. プレスク・ラン
6. ヴィフ
7. モアン・ヴィフ
8. エピローグ・ラン

夜のガスパール

- 第1曲 オンディーヌ
- 第2曲 絞首台
- 第3曲 スカルボ

(論文名) ラヴェル直伝の演奏解釈 ～《夜のガスパール》を巡って～

15. 器楽専攻(ピアノ) 村上 彩菜

(演奏曲名)

R.シューマン

夜曲 op.23

- 第1曲 Mehr langsam, oft zurückhaltend
- 第2曲 Markiert und lebhaft
- 第3曲 Mit großer Lebhaftigkeit
- 第4曲 Einfach

幻想小曲集 op.111

- 第1曲 Sehr rasch, mit leidenschaftlichem Vortrag
- 第2曲 Ziemlich langsam
- 第3曲 Kräftig und sehr markiert

J.ブラームス

4つの小品 op.119

第1曲 Intermezzo Adagio

第2曲 Intermezzo Andantino un poco agitato

第3曲 Intermezzo Grazioso e giocoso

第4曲 Rhapsodie Allegro risoluto

(論文名) R.シューマンと J.ブラームスの近さと遠さ

～《幻想小曲集》作品 111 と《4つの小品》作品 119 の比較検討に基づく考察～

16. 器楽専攻(ピアノ) 林 瑛華

(演奏曲名)

A.スクリャービン

左手のための2つの小品 op.9 1. プレリュード 2. ノクターン

悪魔的詩曲 op.36

ピアノ・ソナタ 第7番 op.64「白ミサ」

ピアノ・ソナタ 第9番 op.68「黒ミサ」

(論文名) スクリャービンのピアノ・ソナタ第9番の構成 —後期ソナタの中での特異性—

17. 器楽専攻(管弦打) 槌田 ねね

(演奏曲名)

Walter S.Hartley ウォルター・ハートレイ

ソリロキークとスケルツォ Soliloquy et Scherzo

Florent Schmitt フローラン・シュミット

伝説 Op.66 Légende op.66

Edison Denisov エディソン・デニゾフ

サクソフォーンと6人の打楽器奏者のための小協奏曲

CONCERTO PICCOLO pour quatre Saxophones successifs et six Percussionnistes

(論文名) ロシアにおけるサクソフォーンの発展

—エディソン・デニゾフ《サクソフォーンと6人の打楽器奏者のための小協奏曲》を中心に—

18. 器楽専攻(管弦打) 松田 拓也

(演奏曲名)

Jacques Ibert ジャック・イベール

室内小協奏曲 CONCERTINO DA CAMERA

吉松 隆

サイバーバード協奏曲 Cyber bird concerto

(論文名) サクソフォーンにおけるフラジオレット奏法の歴史と現状

19. 器楽専攻(管弦打) 岩本 悠香

(演奏曲名)

James Curnow ジェームズ・カーナウ

シンフォニック・ヴァリアンツ

Symphonic Variants

David R.Gillingham デイヴィッド・ギリングハム
ブルー・レイク・ファンタジー Blue Lake Fantasies

(論文名) アメリカ合衆国のユーフォニアムの発展におけるレオナルド・ファルコーニの役割

20. 器楽専攻(管弦打) 川村 大智

(演奏曲名)

伊佐治 直	
ワクワク島周遊記	A Trip Around Wakwak Island
永野 光浩	
マトリックス	Matrix
三善 晃	
5つの素描(エスキス)	5 Esquisses
北爪 道夫	
三つの肖像	Three Portraits

(論文名) 日本における独奏楽器としての ユーフォニアム の 可能性
ー北爪道夫《三つの肖像》の分析を中心にー

[作曲者名、演奏曲名は修士演奏会のプログラムに基づく。また、論文名は本人記載の題目届に拠る。]

執筆者一覧（掲載順）

酒井 恵理子（外国語）

長谷川 真由（教職）

松田 昌恵（声楽）

油井 美加子（ピアノ）

研究委員会構成員（五十音順）

住谷 秀夫 *谷口 真生子

土井 緑 西村 理

羽鳥 三実広 松田 昌恵

松本 昌敏

*印は編集代表

研究紀要 第五十九号

2021年3月1日 発行

(2021年3月31日 WEB公開)

編集

研究委員会

発行

大阪音楽大学

大阪音楽大学短期大学部

〒561-8555

大阪府豊中市庄内幸町1丁目1番8号

電話 06-6334-2136

URL : <http://www.daion.ac.jp/>

ISSN 0286-2670

BULLETIN
OF
OSAKA COLLEGE OF MUSIC

Vol. LIX

2020

Contents

Summaries (1)

Notes

Collaborative English Learning in ONLINE Environment SAKAI Eriko (5)

A Study on Action Play Songs of Young Children

Focusing on Warabeuta for Five Years at Kindergarten in K-City

..... HASEGAWA Mayu (20)

Reports

~ Performance and Interpretation of Japanese Songs ~ MATSUDA Masae (31)

Mikako Yui Piano Recital 2019

“Fusion of Pianism and Image in Piano Works”..... YUI Mikako (38)

Published by
Osaka College of Music
Osaka Junior College of Music
Osaka
JAPAN